郷友

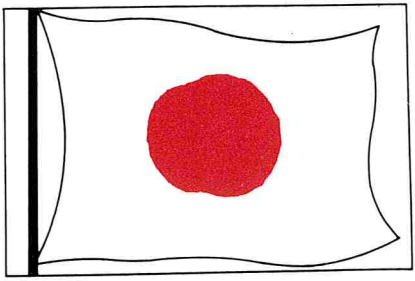
平成元年
12月号

1989
December

平成元年十二月一日（毎月一回一日発行）
第三十五巻第十二号（通巻四一八号）

―自然美散策（芦ノ湖の初冬）―（解説表２下段）

往く年を真に反省し
迎える年に備えよう



表紙写真の解説

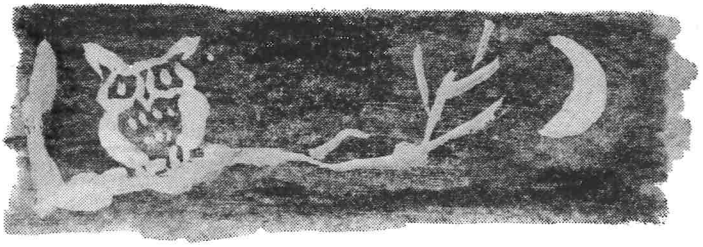
写真家　宝蔵寺　忠

―自然美散策（芦ノ湖の初冬）―

―神奈川県足柄下郡箱根町所在―

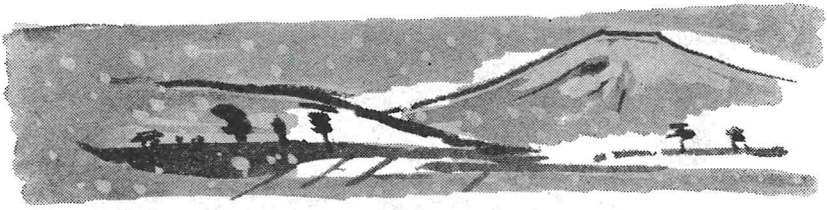
箱根は富士火山帯に属する三重式火山で、二～三万年前までにその主な活動は終り、その後第二期・第三期と小活動が起り火口原湖ができた。最後の爆発は（推定三、一〇〇年前）大涌谷で起り、流出した火山泥流が火口原湖を南北に二分し、北は早川により排水され仙石原湿原地となり、南が芦ノ湖となった。大涌谷はいまもなお火山活動の名残りを留め、高温の熱泥を噴きだしている。芦ノ湖の湖岸線は出入の変化に富み、ほとんど水際まで樹林におおわれ、箱根観光の中心をなしている。とくに南東岸の箱根町・元箱根から眺める〝さかさ富士〟は箱根の代表的景色とされている。この湖には顕著な流入河川がなく、湖水は湖底からの涌水で保持されている。流出は北端の湖尻からの早川と、北西端に人工構築された深良用水からとである。元箱根は芦ノ湖の南東岸にあって、箱根権現（箱根神社）の門前町として栄え、箱根八里のほぼ中央に位置する。この町の北はずれの小高い丘に箱根神社の壮大な社殿がある。創建は歴史的に古く、天平宝字元年（七五七年）といわれ、源氏の守護神として崇敬されてきた。神社正面の湖中の朱塗りの大鳥居は、昭和二十六年講和條約発効を記念して建てられ、今では箱根のシンボル的存在となっている。杉木立の緑を背景に彩を落とすその姿は美しく、平和そのものの風情を感じる。

郷友目次（12月号）



巻頭言……（2）
日米関係再考……国防研究会（3）
「郷友オピニオン」（岩政寛隆・野田治・森本真章・村松文一）……（10）
日米関係の危機ふたたび……斎藤　忠（15）
軍事常識―緊張緩和と防衛……五十嵐　晃（19）
戦いの九原則（その6）……武岡　淳彦（21）
祖国日本に愛と誇りを持つ子を育てる（その5）……多田三重子（25）
ひとりよがりの「道徳・特別活動」ブックレット……気賀　健三（29）
現代に見る間接侵略・革命（十八）……狩野　信行（33）
郷土の城（28）……佐々木信四郎（37）
防衛講演会の開催に因みて……瀬川　時造（40）
青壮年部全国研修会実施報告……矢部　廣武（45）
郷友基金醵金者ご芳名（新・6回目）……（50）
自衛隊だより……（51）
新隊員の一日（123）（え・柏木康武）……牧野　良祥（53）
戦史物語――慕われる指揮官……森松　俊夫（54）
地方だより（石川・長崎・北海道・熊本・和歌山）……（57）
俳壇・歌壇・柳壇……（60）
編集後記……（68）

巻頭言



平成元年を送るに当り

会長　堀江　正夫

本年初頭真に波乱万丈に終始した昭和から平成の新時代を迎えたが、国内外の激動する中で、軈てその第一年を終ろうとしている。

国際的にこの一年間を要約すると、正に硬直した冷戦構造から柔軟な冷戦構造への転換、あるいは、冷戦構造の中での休戦・停戦ともいうべき事態の年であった。

すなわち、全般的には米ソを中心に、勢力的に対話が行われる一方において、引続き軍事力等による態勢の強化が図られてきた。

ヨーロッパでは、ソ連のペレストロイカ政策が、ゴルバチョフの努力にもかかわらず、多大の困難に逢着している中で、共産主義体制の崩壊ともいえる大きなうねりが、ポーランド、次いでハンガリーに起こり、東欧圏内に更に広く拡大の兆を見せている。

一方アジアにおいては、中ソ和解は実現したが、ソ連の軍事力強化は依然として続けられ、日米両国を対象とした平和攻勢が行われる中で、天安門事件を契機に行った、共産主義体制による締めつけは、中国の不安定性を表明することとなり、カンボジヤにおいては、未だ平和的解決の方途を見出し得ず、この中でのベトナム軍の撤退―私は表面的なものと考えている―は、却って複雑な軍事的紛糾を招こうとしており、北鮮の硬直した姿勢にも変化の兆はない。

このように、ヨーロッパはヨーロッパとしての激動を続け、アジアは従来のパターンを基調として不安定に揺れ動いている。

一方国内情勢が、現在極めて不安定な容易ならざる関頭にあることは喋々を要しない。

このような内外情勢の中で、広瀬前会長の後を継いだ私は、新陣容の下で、わが連盟の理念、目標を如何にして継承発展させるかについて、この一年間鋭意検討をしてきた。

会員及び国民各位のご協力を得て、是非共平成二年を、この激動の時代に相応しい、郷友連新発足の年として行動したいものである。

日米関係再考

――日米安保か自主国防か――

国防問題研究会主催シンポジウムから

連盟の友好同志団体の一つである「国防問題研究会」は、六月一五日、東京・九段会館で国防シンポジウム「日米関係再考～日米安保か自主国防か」を開催した。パネラーは阿曽沼廣郷氏（元海上自衛隊中央通信隊群司令）、竹田五郎氏（元統合幕僚会議議長）、吉原恒雄氏（軍事評論家）。司会は斉藤五郎氏（軍事評論家）。参加者は学生、青年、自衛官、戦争体験世代の人など約一七〇名で、メモなどをとりながら、シンポジウムの内容に熱心に聴き入っていた。

（矢部記）

FSX問題はそろばん勘定で処理できる

斉藤　戦後わが国はアメリカとの安全保障条約を結び、安全と平和を確保しながら過ぎてまいりました。しかしながら、最近になって日米関係は暗雲漂うような状況になっています。例えば、新通商法のスーパー三〇一条で日本を不公正な貿易対象国だと名指しをする、あるいは膨大な日本側の貿易黒字・対米投資といった問題から経済摩擦が広がっている。特に象徴的な事象として、アメリカ政府は従来防衛と経済の摩擦のリンクを避ける姿勢であった訳ですが、それに反したFSXの問題が生じました。

そういう中にあってただ漠然と、アメリカが今まで日本を守って来てくれた、日米安保に頼っていれば大体よい、と考えているだけでいいのでしょうか。今日はひとつ、この日米安保体制について各パネラーの方々にご意見を発表して頂き、この問題について皆さんとともに考えてみたいと思います。

吉原　日本の次期支援戦闘機（ＦＳＸ）を、アメリカの空軍のＦ16をベースにして日米で共同開発するという問題が、単なる技術レベルの衝突ではなく、それが日米両国民のナショナリズムの衝突にまで発展してしまった訳です。この問題の経過を見てみますと、日本が国産でやるという方向に固まりつつあった時に、アメリカが横から、自分の国の飛行機を買えといってきた。そしていろいろ交渉をした末、Ｆ16をベースにこれを改良することが決まった。すると今度はまたこれに納得せず、アメリカは自国でいろいろなものを生産するよう要求してくる。結果として日本が大幅に譲歩した形になった訳ですが、これに対し東京新聞社は社説で「安保条約は再検討すべき」と説き、自民党の石原慎太郎代議士は、日本で十分優秀なＦＳＸをつくれるといい「日米安保廃棄論」を唱えるなどの論調を出していますが、こういう意見はいかがなものかと思うのです。

私はいつまでもアメリカの後塵を拝することを潔しとするものではないが、ここで開き直ってアメリカと喧嘩をして何の得があるかをよく考える必要があると思います。歴史観や教育の問題、靖国神社の問題など国家の基本の問題は安易に譲歩すべきではないが、ＦＳＸの問題はそろばんで解決できることです。そういう問題は、できるだけ打算をもって解決するのが望ましいと思います。わが国が独力で優秀な戦闘機をつくれるかというと、まだまだできないのが現状であり、やはり妥協せざるを得ない。政府の国防政策に、昭和三十二年に制定された「国防の基本方針」があり、この中に「日本の国防は日米安保条約によるアメリカの支援」を主体にしていますが、現在までこれが変っていない。

国家の役割とは、最終的には「防衛機能」です。国家には教育に関する機能、経済に関する機能などいろいろあるが、国家以外のものでもできる機能を除いていくと防衛機能だけが残る。これは私的団体では決してできません。本日のタイトルの中に「自主防衛」とありますが、国防とはもともと自主的なものであって、「自主」とわざわざつけるのは厳密にいえばおかしな言葉です。しかし付けざるを得ないところに、日本の防衛問題をめぐる異常な環境があるのです。

また「日米安保か自主国防か」というタイトルですが、これも二者択一のものではない。世界の歴史は、各国が合従連衡して安全を守って来たことを示しています。今日も欧州にＮＡＴＯ、ワルシャワ条約機構などの集団安全保障の機構があり、国連も集団安保を認めています。原則として、すべての国がわが国の敵になる可能性があり、グループで防衛体制を組めばそれだけ敵が少なくなる。さらに、

費用の負担もより少なくて済み、兵器の開発も容易になる。だから、集団安保体制としての日米安保体制は決しておかしくはないのです。おかしいのは、「国防の基本方針」にあるように他国の支援を主にして自国による防衛を従にしている点だと思います。

結論をいえば、国家にとって防衛は本来「自主防衛」であり、自らの防衛力で守るのが当たり前で、同盟とはこれを補完するものだということです。その同盟もいざという時に機能するようになっていなければ意味がない。しかしながら、日米安保の現状はそうなっていないのです。

竹田　独立国が自分で国を守れるのが一番いいんでしょうが、そういう国は世界中探してもない。少なくとも、先進諸国の中にはない。まして日本はこの地理的環境からいっても不可能です。

日本は日米安保体制のもとに平和を維持して来ましたが、その庇護のもとで〝町人国家〟となり、経済大国に成長したのです。一方アメリカは現在、経済的に大変困っている。同盟は公平に責任を分担すべきでしょう。アメリカは今、苦しいが故に防衛分担をより多くヨーロッパや日本に求めている。日本としては同盟国として、経済大国として公平に責任を分担すべきだと思います。

阿曽沼　先ほど自主防衛という話が出ましたが、アメリカには「ニクソン・ドクトリン」というのがある。同盟国に要求する点についてのことですが、自助努力が絶対条件になっています。自助努力をしない国に対しては援助しないということですが、これは当然でしょう。自主防衛という言葉を使おうが、自助の努力といおうが、やはり自ら姿勢を示さないことには効果を上げることはできませんね。

米韓相互防衛条約と比較してみた日米安保条約

斉藤　今自主防衛は当然だという意見を皆さんからお聞きしたんですが、この日米安保体制にも若干不透明なものがあると思います。安保条約の第五条に「各締約国は日本国の施政の下にある領域における、いずれか一方に対する武力攻撃が、自国の平和及び安全を危うくするものであることを認め（中略）共通の危険に対処するように行動することを宣言する」とあります。すなわち、「日本国の施政の下にある」わが国かアメリカ軍が攻撃された場合、アメリカは日本に対して援助する。しかし、アメリカが攻撃された場合日本が援助するという条項はない。

ところが米韓の条約になりますと、「各締約国は現在それぞれの行政的管理下にある領域（後略）」となっていて、たとえばアメリカの施政下にあるどこかが攻撃されたら韓国はこれに対して救援することになります。したがって日

米安保はそういう意味で片務的であり、保護的であるといわれる訳です。

あるいは、「防衛計画の大綱」におきまして侵略に対する対処の中で、「限定かつ小規模な侵略」については、原則として日本が独力で排除する。独力で排除できない場合はアメリカからの協力をまって対処すると書いてあります。「責任を果す」という場合、わが国はこの防衛力の中でどの程度の責任を果すべきでしょうか。

竹田　今、日本には二つの大きな嘘が横行していると思うのです。その一つは、「防衛費突出」あるいは「軍事大国」ということです。今一つは、日米安保体制を強化するということは「アメリカの戦略に巻き込まれる」ということです。第一の嘘については、あえて反論する必要もないでしょう。ではアメリカの戦略はどういうものかと申しますと、今年のアメリカの軍事予算は約三〇〇〇億ドル。日本の防衛費の約十倍で、軍縮とはいえ大変な予算です。これだけの膨大な予算でアメリカはどういう戦略を持っているかというと、世界の自由と安全を守ることにほかならない。自国はもとより、同盟国を守るという意志が極めて高い。同盟国を守る原則は①宇宙と核はアメリカが責任を持つ②同盟国が十分力をおよぼし得ない地域（たとえば中東など）はアメリカが第一義的に責任を持つ③同盟国自身の防衛については、当該同盟国に自ら責任を持ってもらう、である。アメリカは日本に対しては、憲法を押しつけたという負い目があるためか、日本の「専守防衛政策」を認めているのであります。今までのアメリカの国防長官は皆、日本が軍事力でアジアのほかの地域に貢献することは望まないし、今後もそういうことは要請しないとはっきりいっている。日本は、自国の三海峡と南方一〇〇〇マイルを含む領海、領空の守りだけをしっかりやってくれ、ということです。いうなれば、アメリカが日本に期待するのは日本が独立国として当然なすべきことなんです。

そして注意すべきことは、アメリカにとって日本は自国防衛の第一線ではあるが、最終線ではないということです。だから、アメリカのいうがままというのでは困る。やはり、日本の防衛は自主的にやらなければだめだと思います。

斉藤　阿曽沼先生、何か補足することはございますか。

阿曽沼　日本の防衛ということについてですが、「わが国を守る」ということが非常な矛盾の中で存在しているのは事実です。「国家戦略」というものがあって、それを演繹して自衛力、軍事力をこのように持っていく、と帰結させて自衛隊というものができたのではないからです。朝鮮動乱を契機としてアメリカ軍が警察予備隊というものをつく

ったところからスタートしている。海上自衛隊は、昭和二十九年に海上警備隊から昇格したもので、航空自衛隊もその時にできた。国家戦略なくして生れたという、非常に不幸な歴史を持っているのが自衛隊だ。そして、その問題はタブー視されています。憲法は、国の平和と安全を守るために政府が何をなすべきかということについて空白である。今の憲法が「平和憲法である」という教育を受けた人がどんどん社会の中堅になっている。

私は「平和憲法」などというのはまったくおかしな話だし、今の憲法は矛盾していると思うが、今これを解消しようとしてもできない。とにかく、有事の際には被害を最小限にとどめてアメリカの来援を待つというのが、将来予測される防衛だと思います。

吉原　日本の防衛力を強化するのは当然だと思います。そのことについて、反対する人たちの意見で「周辺諸国から警戒されるのではないか」というのをよく聞きます。先般の中国の武力弾圧に対して、制裁するかどうかという議論に対して「日本は過去、中国を侵略したからそういうことは控えるべきだ」といった人がいますが、しかしこれも歴史を知らぬ人の言葉ですね。ヨーロッパなど国が隣り合わせになっていると、攻めたり攻められたりするのが当たり前なんですね。古い国になればなるほどそれが多い。ところが、日本の歴史を繙いてみますとこれほど長い歴史であるにもかかわらず、対外侵略というのが極めて少ないんです。そういうと「島国だから当然だ」というかも知れませんが、ではイギリスはどうか。イギリスの歴史は戦争の歴史です。

日本と中国は、古代から人が往来していたほど近いが戦争の回数はというと、驚くほど少ないんです。特に日本から攻めて行ったことは少ない。もし日本が侵略的な国だったとしたら、現在の国土はもっと広大だと思うし、裏返せば日本の領土が狭いということは侵略性がなかったということだろう。

今円安ですが、日本の経済の実力からいえばここへ来て円が下がる理由は何もないんです。なぜこうなったかというと、ホメイニ師が死んで中東が不安定になり、中国の混乱で日本周辺がキナ臭くなっていることが原因です。日本の商社マンは海外に投資する場合、よくカントリーリスクということを口にします。カントリーリスクが高いということは、安定性が少ないということなので短期間に儲けてすぐいつでも撤収するという用意をして商売をするということなんです。ほかの国に対してカントリーリスクがどうのこうのということをいいますけど、自国のカントリーリスクがどれほど高いかということを考えないんですね。円

が下がっているということは、結局は世界の人たちが日本の防衛力をどう見ているかという、数字的な表現だと思います。だから日本の防衛力はもっと強くなっても決して周辺から文句は来ないはずです。

われわれ記者が周辺諸国の人たちに「本当に日本に脅威を感じるか」と聞くと、必ず「感じる」というが、それはそういうことをいうと日本が経済援助をしてくれるという思惑があるからでしょう。軍事力というのは、それだけでは脅威でも何でもない。実際に使用したり、それを背景にした政策を行うかという問題です。日本は戦闘機の数にしろ、主力護衛艦の数にしろ、大砲機関銃にしろ数が減少しているんですよ。だから「日本脅威論」も減少していいはずなのに実際は増大している。軍事力が問題でないことが明らかだ。

防衛はあくまで「自主」が基本

斉藤　現状としての日米安保体制を前向きにとらえ、より実りのあるものにするためには、どのようにすべきでしょうか。

阿曽沼　以前、シーレーン防衛の問題が活発に議論されたことがあったが、これはアメリカにとって重要な問題な訳です。極東有事の際、日本の本土や沖縄に米軍の基地がある訳ですがアメリカ本土からそこに大規模な兵力を投入しなければならない。この長い補給路を確保するために、シーレーン防衛は不可欠だといっているのです。日本の国民生活を維持するための物資、例えば油や鉄鉱など、そういうものを輸入する輸送線を守れというのではないんです。日本がアメリカの軍事力投入のための、長い補給路を守るのは日本自身の防衛のためだけでなく、世界的に重要な問題なんです。そしてこういう要求は日本だけにしているのではなく、ＮＡＴＯ諸国に対してもしているのです。

最後に「日米安保の存在意義」ですが、これは単なる日米の同盟関係でなく西太平洋、アジア全体の平和と安全のためになっている。私は昭和五十三、五十四年に中国に行った時、向うの中日友好協会の人たちに「日米安保体制は、中国の国家利益を考えた時でもソ連の海軍力の抑止などいろいろと効果があるものだと思う」と言いました。もちろん中国に有益だから意味があるというわけではないが。

日米安保は日本がアメリカの戦略に巻き込まれるというものではなく、日本がアメリカを利用するぐらいでなければいけない。言葉は悪いが、アメリカを人質にとっておく、という視点で眺める必要がある。

吉原　私も、シーレーン防衛はとにかく重要な問題だと思

います。アメリカが日本に兵力と軍事物資を送る場合、一番重要な手段はやはり船です。その船が、ソ連海軍の得意とする潜水艦に次々と沈められるといった事態になればどうにもならない。アメリカはレーガン政権の時に「六〇〇隻海軍」というのを目標に掲げていました。ブッシュ政権の現在、財政的にそれは無理ということになっていますが、万一六〇〇隻海軍が可能になったとしても、アメリカが日本に兵力を送る場合、それを護衛する駆逐艦はその勘定には入っていない。六〇〇隻海軍の駆逐艦、フリゲートの任務は第七、六艦隊あるいは第二、三艦隊など空母機動部隊を守るためのものだ。日本で一〇〇〇カイリのシーレーン防衛をできない、しないならば、アメリカがその気でいても日本を助けることはできないということです。

竹田　私の今までの説明で足りないところを付け加えますと、同盟というのは責任とリスクと役割を公平に分担して初めて成り立つものだということです。それは、その力に応じてといった方が正しいかも知れません。たとえば、アメリカはペルシャ湾紛争の時、日本がアメリカ及び諸外国の軍隊のペルシャ湾への派遣費、あるいはあの地域の経済援助の経費を日本が分担してくれたと評価していましたが、もしあの時アメリカの軍艦が機雷に当って何隻か沈む、何百人かの軍人が死ぬということがあった場合、経済負担だけで済むだろうか。「日本だけが何を悠長なことをしている」と非難されたであろうと思うんです。日本は機雷の除去能力が世界一流ですから、掃海協力でもすれば日本の国際的評価はもっと上がったと思います。そういったことは、専守防衛にも違反しない行為なんですから。

斉藤　今日は長い間有難うございました。

阿曽沼廣郷氏

竹田五郎氏

吉原恒雄氏

斉藤五郎氏

郷友オピニオン

〈随想〉

私の「日本神道」観

岩政寛隆
（山口県支部
通津郷友会名誉会長）

人!! は霊止（ヒト）であって霊格であり肉体を通して霊格を具現する天地の法（ノリ）の一駒である。

この天地の法を教える道に儒教があり、仏教があり、キリスト教や回教、ラマ教等々があり夫々所依の教典があって、その教義を述べ、作法の道を説いているのに、吾が国の古神道に限り、神拝詞としての「大祓詞（オオハライノコトバ）」はあるが、所依の教典が有ることを聞かない……それでいて、何となく神の存在を観じ、それに額くことの大事を私は感ずる……日本神道とは何であるか……私には永い間の悩みであり疑問であったが、昭和の五十年代に至って、角田忠信氏の大脳の働きの解明にふれ、この疑問が少し宛解（ホグ）れ始めた……氏によると大脳の働きは左右で異なり、左脳はゴロス脳として、言葉や論理や計量を司り、右脳はバスト脳として笑ったり、泣いたり喜んだり悲しんだりする情の働きや、鳥や虫の声（音）に感動したりする働きを司っている……これは欧米人はもとより、印度・支那・朝鮮の東亜民族までが殆どこの共通型であるが、ひとり日本民族だけはこのゴロスとバストの両脳の作用を全部左脳でやって了い、右脳はイメージ脳として働いておりイメージに直結したもの（パロールと呼ぶ）が自在に次々と右脳に配列され記憶されておる……これが所謂日本人の鋭い直観力であると言う……。

日本の古神道は宇宙の理法を日本人の鋭い直観力によって捕え究めたもので文章に乗らない教外の別伝（法）である。

世界の宗教はその進む道は千差万別だが、何れも天地の法（ノリ）の探求であり、その場、その時、その民を導く為の方便の教えである。

仏典もバイブルもイメージの書であり、イメージのもつ直観力によってのみその極致の解明が出来るのである—唯

仏と仏のみ乃(イマ)し能く究了したまへり……法華経――……印度で釈尊が大乗を説き顕・密の教えを垂れ給うたが、それが支那・朝鮮では、解義と伝承に終ったが日本に来て始めて阿弥陀如来の請願は花と咲き、法華経も吾等のものとして完成し実を結んだ。

キリスト教亦然り……キリストの「われ、地に平和を投ぜん為に来れりと思うな、平和にあらず反って剣を投ぜん為に来れり……」を引用して、キリストの神は、雷鳴の様に人間の非行を叱りつけ罰を加える神であるかの様に説く宗教学者もあるが、あの時代、ある場所に於ける人間救済の方便であったと見るとき、邪神でもなく、荒ぶる神でもないことが判る……その姿が今日の日本のキリスト教ではあるまいか……小アジアに発したこの教えも法(ノリ)の直視・直観の出来る日本に来て花も咲き実を結ぶものと私は確信する。

教典をたてず、ことあげもしない日本神道のおおらかさこそ万教を包含し、万教の帰一する天地の法(ノリ)だと私は信ずる。

最近一部のキリスト教団が靖国神社を誹謗したり、仏教の一宗派が伊勢の神宮を侮蔑する論説を宗派機関誌に揚げたりすることもあるが、その何れもが所属の教団や宗派の教勢、拡充の我欲に基く人間的業(ゴウ)で天地の法(ノリ)には全く関係はない……又憲法に示す、政・教の分離も日本の民族理念を知らずイメージ脳の働きのないアメリカ人の敗戦日本への独善的押し売りである。

最近聞いた話だが、伊勢の神宮の式年遷宮に当り奈良の薬師寺門徒や某キリスト教団から毎年の様に遷宮の為の奉賛金が奉納されている由を聞くし、地元で行う戦歿者の招魂祭が隔年神式によって行われる際、仏僧籍のご遺族、殊に毎年ご参列の旧岩国藩主吉川家の菩提寺、万徳院(マントクイン)の老師、吉岡和尚が共に拍手しての御拝礼や在家の仏式葬儀に神官が焼香礼拝される姿に接するとき、日本神道の真髄と真骨頂を拝するものである。

この様に日本に於ては、神・仏混淆でなく神・仏一如であることを深く感ずる……。（H・元・八・三〇朝記）

「悪の定義」

野田　治
（宮城県会員議員秘書）

「表現の自由」や「言論の自由」も含めて最近この様な事

がよく言われる。宮崎勤の犯した連続幼女誘拐殺人事件後この事件を発端として、ホラービデオは規制すべきだ！いや表現の自由を守るためにすべきでない！とか左右両意見が新聞の投書欄を賑わしている昨今です。

両方の意見とも読めば成程と思わせる。しかしよく吟味してみると表現の自由云々という方々の意見にはその意見の裏にある心情に総じて自己中心的で社会とか国という公的意識に欠けているのが分る。自分がビデオが好きでそれ等まで規制が及ぶと困るとか、自分は何とも無いんだから受ける側のその人自身が悪いのではないか規制までは必要ないと思う等々言っておられる。成程と思わせられる。しかし「表現の自由」とはそれを獲得するために闘った過去の義人達はここで言っている様な表現の自由を獲得するために命がけで闘ったのでしょうか？　答えは「否」です。この言葉の意味する内容は当時より政治的意味合の濃いものでありましたし、権力に対する真の自由獲得と社会正義を貫くための闘いであった筈です。

ではロリコンやホラービデオを作っている側の人々に「人間の尊厳」、「人命の尊さ」、「真実の愛に対する正しい考え」、個人、家庭、社会、国家、世界の現在と未来に対する責任感など有るでしょうか？　答えは「否」であります。恐らく自己中心的な金銭的欲望や無抵抗の幼女達の人権を無視した極めて自己中心的性的欲望の実現をビデオに表現したものであると思われます。人間は特に青少年時代に誰を師と仰ぐか、どの様な本に接するか等により大きな影響を受け精神的に成長して行くものです。大人の責任とは子供を含めた全ての人の社会環境を整えて悪を無くす事です。その為に法的規制が必要なら善悪の正しい判断と信念に基づき法的規制に歩を進めるべきです。最後に「悪の定義」とは個と集団を問わず「自己中心的な考え目的欲望等成すために他を犠牲にする事」です。悪の働く環境を無くす為戦いましょう。

元年度版防衛白書を読んで

森本真章
（郷友連盟顧問
福井工業大学教授）

国の政策において最も重要なものは「国の平和と安全を如何にして護るか」であることは言うまでもない。インドの中学三年生の教科書に「インドは中国との間に、一九四五年に平和共存協定を結んだ。そこでインドは中・印国境

の兵力を減じてその人員を産業界に転用した。一九六二年に中国軍隊はインドの領土に不法侵略を度々くりかえした後、同年十月に中国軍隊はインドに裏切り的攻撃を開始した。インドの軍隊はそのような大規模な攻撃に対する準備がなく、数のうえで圧倒的に優勢な中国軍のまえに退却しなければならなかった。そこでインドは急いで軍隊を強化、武器や装備の生産増大の手段をとった。この経験から、国の防衛策は、インドの平和と繁栄に欠くことのできないものである」と教えている。

また、アメリカの高校教科書にも国の防衛の重要性を教え、戦争の原因の一つとして相接する両国に軍事力の格差が生じたとき、強い方から弱い方に対して侵略が始められると記述している。特に朝鮮戦争の事例をあげ、当時、北朝鮮の軍事力が韓国の軍事力の約二倍以上であったことが戦争の直接的原因であったと教えている。

さて、平成元年度版の防衛白書を見ると、隣国のソ連は、極東の軍事力を質的にも量的にも増強していることを指摘している。ソ連は経済的に極めて困難な情勢の中にあるにも拘らず、なぜかくも、わが国周辺の軍事力を増強するのか。その真意を考えてみる必要があるのではないか。ソ連は、わが国の経済力、ハイテク技術を高く評価しており、戦略的立場からも、わが国をソ連の傘下におさめたいとの意向が、モスクワ放送の中に、しばしばみられる。右の情勢の中において、わが国としては、日米安保条約の緊密性を強化するとともに、わが国の防衛力の強化を図ることが最も重要と考えるものである。

社会党に政権は渡せぬ

消費税より、大切なものが沢山ある

村松文一（静岡県支部会長）

社会党の言うことは、最近、政権の匂いにふらつき出し信用できないけれども、今現在、党の幹部が言っていることを綜合して、彼らが政権を取ったら、我が国はこうなるだろうと、推論してみることも、必要である。

私は、次のようになると思う。

『我が国は、何をやって見ても手詰まりになって、世界から孤立してしまう、そして、やがて東側即ち社会主義諸国に、近づいていくことになるであろう』

ここでは、国の安全、軍事的な側面から考えてみよう。

彼等は言う、

「日米安保は存続する、自衛隊も維持する、世界的に米ソのデタントが進む中にあって、米軍の基地は逐次縮小して撤去にいたらしめる、非核三原則を厳格に堅持する」と

一見もっともらしく聞こえるが、中味は深刻で大きい。社会党のやり方は、自分から破棄を言い出すより、相手の嫌がることをして、実質的には日米安保が働かなくなるように仕向け、相手が怒って破棄を言い出せば、思うつぼ、と言うに等しい。

米ソがデタントに向かい、米中に和解が進むであろう昨今、それでなくても、経済など日米関係の舵取りが難しい時に、このような態度をとっては、両国間が冷え込むことは必然、こんなことをすれば、日本は世界において孤立することになる。

行き詰まってから、袖にされた米国や西側諸国に、詫びを入れて、安全保障関係をやり直すことは難しい、さりとて残る大国、ソ連、中国と組んで安全を図ろうとしても、西側からはぐれた我が国は、いいように付け込まれて、うまくいくとは考えられず、碌なことはないだろう。

一体、お前はどちら側の国だと聞かれて、我が国は非同盟非武装中立です、といって通るような呑気な我が国の成り立ち、現状ではない。

社会党に限らず我が国の政党ほど、自国の国防や軍事に関して、異常な反応を示す国はない。軍事は体制の如何にかかわらず、国家成立上欠くことのできない要素である。それにもかかわらず、国際的な軍事責任を果たそうとせず言を左右にして逃げ回る我が国に対して、いざと言う時、誰が応援してくれるだろうか。

「いざ」と言う時などないと、強弁する非現実的な社会党に、国を預けることは出来ない。

消費税に気を取られて、国家の基本に関する大切なことを忘れないで、次の衆議院選挙に臨まなければならない。

名言

◎今日という日を捕えよ！　いま、始めよ！　毎日毎日が新しい生活なのだ。その生活を捕えて、生きよ。今日という日に、すでに明日への歩みがあるからだ。

◎バイタリティーとは、最後までやり抜く能力だけにあるのではなく、最初からやり直す能力にもあるのだ。

◎成功と失敗―われわれはこの二つを相反するものだと考えている。だが、本当は違うのだ。この二つは相伴うもの、つまり、ヒーローとパートナーなのである。

◎あなたがいても気にならない、と言われたら、ほめられていると思いなさい。あなたはその人にとって、違和感を感じさせない、信頼できる存在になったのです。

日米関係の危機ふたたび

斎藤 忠（ちゅう）
（国際政治・軍事評論家
日本を守る会代表委員
連盟顧問）

自民党の大敗が惹き起こした日本批判の風潮

先頃の参議院議員選挙の折の自由民主党の徹底的敗北は、われわれが思いも及ばぬ強烈な印象を諸外国にあたえたように思う。イギリスの日刊紙「ファイナンシアル・タイムズ」の「三十四年に及ぶ自由民主党の支配を脱れて、いまや、日本は、より多元的な民主主義に向かって進む可能性を示しつつある」という感想などは、最も穏当な一例と言わなければなるまい。

更に、また、この事態が、諸外国一部の知識人や指導者たちに、日本批判の機会をあたえたことも確かであろう。たとえば、ジェームズ・ファローズ。「日・米両国の利害は、基本においては、たがいに激突しつつある。それが真実なのだ」という彼の発言を、そのままに信じつつある人々も、決して少なくはあるまい。「当面、それをひたすらに押し隠して、両国の接近を図って見たところで、果たして成果は得られるか？　寧ろ、それは日米両国の親善のためには却って有害であろう」とまで、彼は主張するのである。

「日米両国は運命共同体」の想念

事実、アメリカ合衆国内部――わけても東部諸州には、日本に対する不満を抱き、非難の言を口にする者が多いことは否定できない。だが、ブッシュ大統領の共和党現政権は違うのだ。日本との間の大局における利害の一致を確認しつつあることは明白と言わなければならない。

太平洋を間にして相対するこの両国は、いわゆる運命共同体。互いに信頼し、協力することによってこそ、相互の利益を確保し得るであろうという。その考えを抱く者が、アメリカ合衆国において――とりわけ、西部諸州において

圧倒的に多いことは、虚心に両国の関係を見まもりつつある者ならば、誰しも確信するところであらねばならない。

衰退の事態著しいアメリカ合衆国の対外経済復興の途は、誰が考えても、唯ひとつ。アジア・太平洋世界の諸国、わけても、その中核たる日本との関係の新しい進展を図る他には在り得ないであろう。

その日本を中心とするアジア・太平洋地域の諸国と、アメリカ合衆国との間の貿易額は、昨一九八八年において、実に、二千七百十億ドル。

同じ時期におけるヨーロッパ諸国との間の貿易総額、一千八百六十億ドルと比べて見よ。これは、まさしく、瞠目に値する変化であらねばならない。

日本の経済力に対する恐怖と警戒

それにしても、合衆国議会における対日警戒論のきびしさには、今更ながら、驚くほかは無い。

「日本の経済力の脅威こそは、ソヴィエト連邦の軍事力のそれを遥かに凌ぐもの。今のうちに対応措置をとらぬ限り、やがては、急増するその経済力によって、致命的な打撃を蒙らざるを得ないであろう」と言う。——今日まで、合衆国議会で頻りに繰り返された反日派の発言は、そのような対日強硬論であったのだ。

そのような事態の中で、此処しばらく、一部の人々の口にのぼって居たのは、日米安全保障条約廃棄の主張であった。それは、すでにレーガン前政権の時代から、合衆国の対アジア・太平洋政策の大きな障害となりつつあったのである。

合衆国議会の反日勢力

本年あらたに登場したブッシュ政権にとっても、この事態は、そのアジア・太平洋政策の進展にとって、なによりも大きな障害であらねばならなかったのである。

そのような「日本叩き」派の中でも最も強硬な主張を続けつつある一人が、事もあろうに、わが眼前の太平洋岸モンタナ州選出上院議員ボーカスであることは、合衆国議会の日本関係論議に関心をお持ちの方ならば、つとに御存知であろう。

本年春、五月、そのボーカス議員の本拠モンタナ州ウズマンで、州の全域からおよそ百名ほどの貿易関係者が集合して、対日貿易を主題とする研究会が開催されたことがある。

研究会は二日にわたって盛大に行なわれたのであるが、

其処でも、地元選出の上院議員ボーカスが招かれて、一場の挨拶を行ったことは言うまでもあるまい。

だが、問題は、その挨拶の内容であったのである。――平素の主張をそのままの、歯に衣着せぬ対日強硬論。一言一句、日本を叩きのめす激しい言説には、集まった人々がすっかり白けてしまったのも、言うまでもあるまい。

議員と選挙民との間に見る疎隔の事態

取材に出席して居た新聞記者たちも、さすがに唖然として、顔を見合わせながら、肩をすくめる有様。そもそも、このモンタナ州の中小企業者は、州の産出品の数々を日本に輸出することによって、生活を維持して居るのである。

そのことをすらも忘れてしまったと言おうか。それとも、無視してしまって居ると言おうか？　とにかく、会衆の或る一人などは、思わずも苦笑して、「なんと、まあ、五年がところは遅れて居るねえ」と呟いて居たと言う。

いずれにもせよ、今は、合衆国も、日本へ向けての輸出促進に必死の時代なのである。

本年あらたに発足したブッシュ政権にとっては、なお更のこと。このような動きは、合衆国のアジア・太平洋政策にとって最大の障害となりつつあるのだ。

ブッシュ政権に対する米国民の支持率

そのブッシュ大統領に対する合衆国々民の支持率は、十月十六日発行の週刊誌「タイム」の報道によるならば、七五％、レーガン前大統領のみならず、カーター、フォード、ニクソン、各大統領の就任後ほぼ同時期における支持率をも引き離している。

ブッシュ大統領の対日本政策への米国民の期待は、それほどまでに大きいと受け取るべきであろうか？

それにしても、気になるのは、この後の対日関係だ。「合衆国政府が今日以上に巧妙に事態に処し得る可能性」に就いては、質問に対する答えに示された国民の期待と信頼は大きく動揺している。「深く信頼している」との答えが三八％。これに対して、「信頼の度は極めて僅か」が五四％。

まして、「合衆国の経済的繁栄は今後も続き得ると思うか？」との質問に対しては、実に六五％が否定的回答であった。明日の見通しは、決して明るくはないのである。

問題は、この場合も、また、日本の競争力なのである。その太平洋の彼岸の国の急速に高揚しつつある技術力と競い合って、アメリカ合衆国は果たして昨日までの優位を維

持することが出来るであろうか？　それが問題なのだ。

このようにして、アメリカ合衆国の産業は、また財政は、非常に広汎な面で日本に依存している。その事態は、もはや、たやすく改変できるものではない。だが、合衆国々民は、その事実に就いては殆ど無知と言おうか？　正確な認識を持っては居ないのである。

航空自衛隊次期支援戦闘機に関する交渉

まして、その日・米両国のあいだには、更に重大な、技術競争の問題も在る。航空自衛隊の次期支援戦闘機（FSX）に関する経緯は、その一つであろう。

そもそも、産業技術は、本来、国防と密接な関係を持つもの。とりわけ、アメリカ合衆国においては、高度の産業技術は、殆ど挙げて、専ら国防のために用いられて来た。

だが、いま、わが自衛隊の次期支援戦闘機の問題は、アメリカ合衆国がその技術的優位を喪う危機を示唆する事態を招くことになったのだ。

合衆国側に言わせるならば、「この問題の進展如何によっては、われわれは、今日以後十年以上にわたって、またしても、軍事技術の根底を揺る新しい挑戦に直面することになろう。日本の宇宙産業は、今のところは、まだ規模も小さい。技術も幼稚ではあるが、やがては、必ずわれわれを驚かす存在になる時が来るに相違あるまい」と、深刻な憂慮を表明する有様である。

事実、また、FSXの問題の成り行きは、その憂慮が決して無根拠のものでは無いことを明らかにして居ると言えるであろう。

繰り返して言う。いまアメリカ合衆国の財政は、また産業は、非常に広範な範囲で日本に依存して居るのである。しかも、この事態は、もはや後退を許さない。ただ、合衆国々民の多くは、その事実に関する限り、正確な認識を持っては居ないのだ。

そのために、日米両国の関係は、早くも、容易ならぬ危機の状態に在る。一歩を誤るならば、すでに内部崩壊の事態に在るソヴィエト連邦の必死の進出を許さぬとも限らぬのである。

軍事常識

緊張緩和と防衛

五十嵐　晃
（連盟理事）

〝冷戦は終った〟ないし〝終りつつある〟という認識が内外に広まっている。英国国際戦略研究所の『戦略概観88―89』（本年5月刊行）でも、「歴史家が一九八八年を回顧するとき、それを冷戦の終った年とみることになるかもしれない」と述べている。〝冷戦は終った〟の意味するところ、①東西対立の構図をもって国際社会をとらえる時代は過ぎた②ソ連の脅威は薄らいだ、と一般に解されている。

確かに、このところ東西関係は対話・協調の努力が続けられており、変化の兆しをみせている。しかし、だからといって、東西関係が直ちに全面的に改善され、より平和的・安定的になるという保証があるわけではない。冷戦の象徴というべきベルリンの壁は事実上撤去されるに至ったが、板門店を自由に通行できるようになる日が何時くるか見当もつかない。むしろ、今後なお多くの紆余曲折さらには揺り戻しも予想され、波らん含みといわざるをえない。先の中国の政変は、はしなくもその懸念を実証する結果となった。ゴルバチョフのペレストロイカも難航し、東欧諸国でも混迷を生じている。緊張は以前より弛んだが、国際情勢はかえって流動化し、不透明化してきた。

これを軍事面からみると、ソ連の一方的兵力削減の発表、アフガニスタンやカンボジヤの紛争の政治的解決への動き、米ソ包括軍縮交渉の再開、欧州通常戦力交渉の開始など対立を緩和するムードが醸成されつつある。しかし、東西間の軍事的対峙関係が、基本的に変化したわけではなく、ソ連の脅威が薄らいだと即断するわけにはいかない情勢がなお続いている。本年7月開かれた西側首脳によるアルシェ・サミットでは、その政治宣言のなかで、この点について次のように端的に指摘している。

「欧州及びアジアにおけるソ連に有利な軍事力の不均衡は、我々各自にとり依然として脅威である。従って、我々の政府は、警戒を続けなければならないし、我々の国の力を維持しなければならない。見通し得る将来においては、我々各自が、適切かつ効果的な核戦力と通常戦力とを適正に組み合わせることによって、既存の同盟関係の中で抑止戦略を維持していくほかに道はない。

武器や軍事力の重要性が減じるような世界の到来を促進

するために、我々は、化学兵器についてはその世界規模での禁止を、欧州における通常兵力については我々の安全保障上の要求を満たす形で可能な限り低いレベルでの均衡を、また米ソ両国の戦略核についてはその実質的な削減を早急に遂行することを改めて約束する」

また、9月に発表された平成元年版「日本の防衛」（防衛白書）によれば、ソ連の極東正面における軍備管理・軍縮提案について、「依然あいまいな表現が多い」とし、一方で引き続いて戦力の再編・合理化及び近代化を進めていると警告している。また、極東ソ連軍の配備・展開状況について、沿海地域・樺太・オホーツク海・カムチャッカ半島などわが国に近接した地域に重点的に配備・展開されているとみている。

緊張緩和と防衛は、二者択一的にとらえられ勝ちである。果してそうであろうか。

一昨年12月米ソINF(中距離核)全廃条約が調印され、昨年5月発効したことは記憶に新しい。この条約は、核戦力全体の量の数パーセントに過ぎないにしても、五〇〇㎞から五五〇〇㎞の射程距離を持つ地上配備のNIFを全く廃棄するという意味で画期的なものとみられている。

その交渉の経緯をふり返ってみると、ソ連が一九七七年頃SS―20（射程約五〇〇〇㎞の長射程中距離核）を大量に配備し始め、これに対抗してNATO側が米のINFを西欧に配備しようとした時に、西欧諸国内で反核運動が渦巻いた。ソ連としては自からのSS―20を減らすことなく、西欧の反核世論を利用して。NATOのINF配備を阻む動きをみせたが、NATO側は配備を強行する一方、削減のための交渉は進めていくという、いわゆる二重路線を採り、結果的には西側の結束をソ連に明確に示すことによって、全廃の合意に持ち込んでいる。防衛と緊張緩和とは、相対立するものではなく、車の両輪のように補完し合うものであることを示した好例であろう。

東西の軍事力が最も密度濃く相対峙する欧州正面で、NATOは早くから政治戦略として、防衛と緊張緩和の二重路線を、軍事戦略としては柔軟反応戦略を採用してきた。そのことがこれまで大規模な武力紛争の発生を抑止してきたとみることができる。

80年代後半頃からの、いわゆる〝ニュー・デタント〟の正体と落ち着き先がはっきりしない以上、またそれをはっきりさせるためにも、引き続き二重路線を維持する必要があろう。このような考え方は冷戦的思考を脱却しきれない時代錯誤とするそしりは当らないものと思われる。

（了）

戦いの九原則（その6）

武岡淳彦
（兵法経営塾長 連盟顧問）

目的と目標の関係はクラウゼウィッツのいうとおりだが、イギリスの著名な軍事評論家リデル・ハートも目的や目標について自らの研究から導きだした原則を述べている。彼の所論の第一は、目的を手段に適合させよである。手段はもてる力によって大枠がきまってくる。したがって目的も持てる力の範囲内で考える必要がある。そんなことはわかりきったことだと思いがちだが、その原則に反して大失敗をやらかしたのがあの天才武将ナポレオンであってみれば、この原則をバカにしてはならないのである。さきに米軍の目標選定についてのべた際、彼らが可能性について十分検討して決定すると述べたが、このリデル・ハートの原則は、可能性を基準に目的をきめよという、米軍の場合よりさらに厳しいものだ。

企業の場合メーカーはシェアを、バイヤーは利益を目標にするケースが多いが、何れの場合も売上げがあってはじめてシェアも延び、利益もあがるのである。したがって手段つまり持てる力でその達成が可能かどうかは、需要に対する判断にかかってくる。神武景気のころ、それまでの好況を真需要と思い、来年も続くと考えて多額の借入をして工場を拡張し、増産態勢を整えたところ、好況は去りニーズは落ちこんで金利を払うにも追われ、あげくの果てに倒産した企業があったが、これなどは明らかに判断が甘かったのである。

この判断をもっとも重視したのは『孫子』だ。『孫子』はこのために五事、七計をあげる。五事とは道・天・地・将・法だ。いずれも国が平素から注意して国の足腰を鍛え、有事に備えるための要件だ。立派な政治・周囲の天候気象の研究・すぐれた将軍の養成・軍の編制装備の充実、規律の維持のことだ。七計とは敵と戦うか否かの状況判断のとき、彼我の優劣をきめる比較要因だ。主いずれか道ある、将いずれか能ある、天地いずれか得たる、法令いずれか行わる、兵いずれか強き、士卒いずれか練れる、賞罰い

ずれか明らかなる、の七項目である。この七項目を総合判断して優劣をきめるが、この判断に希望的観測や先入主が入っては工合が悪いので、廟算せよというのである。廟とは、先祖の墓だ。つまり先祖の墓の前で作戦会戦を開き、明鏡止水の境地で判断せよというのである。その結果、勝てると判断したら戦へといい、それを「夫れ未だ戦わずして廟算するに、勝つものは、算を得ること多し。勝たざるものは算を得ること少なし。算多きは勝ち、算少なきは勝たず、いわんや算なきにおいておや」の名文で強調している。先勝後戦主義だ。この趣旨は第四軍形篇にもみえる。「その戦い勝つことたがわず。たがわざるとは、そのおくところ必ず勝つなり。すでに敗れたるに勝つものなり。故によく戦うものは、不敗の地にたちて、敵の敗を失わざるものなり。この故に勝兵は、先ず勝ちてしかるのち勝を求め、敗兵は先ず戦いてしかるのち勝を求む」がこれだ。

この『孫子』の考え方は、つまるところ目的の決定だ。また目的あるいはそのために設けられる目標の選定を、あやふやな気持できめてはならないということだ。アメリカ軍はこれを可能性の重視といい、リデル・ハートはさらに一歩踏みこんで、手段で目的をきめよ、すなわち目的を手段に適合させよといっているのである。いずれも目的または目標のジャンプを戒めたものだ。だがこれは、トヨタの神谷正太郎のいうように「客は商品にケチをつけても、これが欲しいといわないから困る」といったが、たしかにニーズの読み、つまり売れる予想。目標をきめることはむつかしい。

そこで『孫子』のいうように、そのための廟算、つまり状況判断が必要になるのである。『孫子』はそのためのポイントは七計、すなわち七つの比較要因にあるとしているが、『作戦要務令』も比較要因をあげてその具体的要領を示している。「敵情なかんづくその企図は、多くの場合不明なるべしといえども、既得の敵情のほか国民性、編制、装備、戦法、指揮官の性格等その特性、および当時における作戦能力などにかんがみ、敵としてなしうべき行動、特にわが方策に重大なる影響をおよぼすべき行動を攻究推定せば、わが方策の遂行に大なる過誤なきを期しうべし」。これを企業の場合におきかえてみると、たとえば次のように活用できる。「この新商品に対する消費者の需要、特にどれくらい売れるかなどの予測はむつかしいが、これまでの同種の製品の販売実績、あるいは他社の同系統の商品などの売行き状況のほか、その地方の住民の好み、生活程度、最近の傾向特に流行状況など、新商品をめぐる諸般の事情および景気、それに住民のふところ工合いなどを念頭において考察すれば、その商品の販売方策に大きなミスは

ないであろう」ということになる。

ここでいう状況判断とは、要するに見込みだ。企業には造船会社や印刷会社のように注文をうけて仕事する受注型と、一般のメーカーや出版社のように、自分で見込みをつけて事業化する見込型とがある。見込みがあたるあたらないは、特に見込型企業にとって儲るか儲からないか、場合によっては会社の浮沈をきめる問題だから、経営者にとっては生命がけの判断だ。だから伊藤忠のかつての名社長越後正一などは、太平洋戦争中の大本営参謀瀬島竜三を起用し彼の発案による業務本部を設置したくらいだ。業務本部の仕事は見込みをたてることだ。世界を相手に商売する商社では、世の中の変化への対応のよしあしが業績を左右する。変化には景気の変動が大きいが、国際的動乱も大きなビジネスチャンスだ。たとえば中東戦争やイラン革命がそれだ。戦争が起れば石油、ゴム、金属、穀物などの戦略商品の価格は、二倍から四倍にはねあがる。「いつごろ戦争は起る」との見込みがたてば、その前に買付け、価格急騰後に売れればぬれ手に粟の儲けができる。

見込みをたてるには、いくつかの予想される事態をあげ、その兆候を考え、それをじいっと調べることだ。世の中のことは決して青天へきれきに起きない。必ず兆候がある。日航機の群馬県での墜落事故でも、尻もち事故と修理ミスによる兆候があった。このように起きる事態には必ず兆候がある。だからいくつかの予想される事態、状況、場合、相手の出方などの見込みを揃えて列挙し、それぞれの兆候をあげ、その兆候をいつ、誰が、どうやって調べるかを考え、それを実行すれば見込みがたつわけだ。この兆候から、つまり見えるものから見えないものを判断する手法は、アメリカ軍の状報見積の特徴だ。先見洞察なども、そのポイントはこれだ。

こうして見込みがたてば次は対策だ。対策とは目的をきめることだ。場合によっては目的はきまっていて目標をきめることもある。目標とはクラウゼウィッツがいったように、目的を達するための手段であり、当面の前進目標である。はじめにのべたリデル・ハートの「目的を手段に適合させよ」の手段に適合した目的をきめることの目的も、厳密には目標をもさしているとも考えられる。だが見込みがたつということは、暗黙裡に、手持ちのパワーにより達成できるあるいはできないの予想がたったということだから、むしろここでは手段・方法といったやり方にウエイトがかかるとみてよいわけだ。この手段方法はすでに目的、目標の枠がはまっているから、ナポレオンのモスクワ遠征のような実力を越えた途方もないものではない。つまり着実で実行性のあるいくつかの選択技のなかから最良のものを選

びだす作業だ。

アインシュタインは、状況判断には二種類ある。第一は今うつ手は何かの判断、第二は選択技（行動方針）の選択の判断だという。第一の判断は目的、目標の決定であり、第二のそれは手段方法のそれだ。先般亡くなった近鉄のオーナー佐伯勇は、古語にいう「策に三策なかるべからず」をモットーとし、社内問題の解決には必ず三策あげ、その三案を比較して最良案を違ぶよう指導していたが、これは選択技の選定だ。金がかかるからダメだとメンタルチェックしたが、金をかけずにやる方法はないか、取引先との関係が面倒になると落したが、たとい面倒になってもやった方がよくはないか、など三策をきめる場合につっこんで考えてみることはきわめて重要だ。

戦略・戦術などは、もともとこの手段方法で相手の度肝をぬくために考えられたものだから、ここで知恵をだすのがすぐれたビジネスマンのすることだ。ともあれ、リデル・ハートの論をまつまでもなく、目的、目標と手段方法とはきってもきれないものだ。だからアメリカ軍では目標がきまったとき、すでにプランは八割ぐらいできていたというのも当然のことだ。この突っこみが杜撰（ずさん）であれば、目的、目標が杜撰となり、プラン全体が杜撰になるわけだ。名将はウラのウラまで読み目的、目標をきめるのだ。

郷友連盟の理念

（昭和五十三年三月総会決定）

わが国の歴史と伝統を尊び、愛国心を高め、郷土の繁栄、日本の安全を図り、世界の平和に寄与する。このため

一　私たちは立派な日本人としての修養につとめよう。

一　私たちは天皇を中心として全国民の団結を固めよう。

一　私たちは道徳を重んじ、公共に尽くし、国民の義務を果たそう。

一　私たちは国や社会の秩序正しい進歩を図ろう。

一　私たちは力を合わせて郷土を、日本を守ろう。

祖国日本に愛と誇りを持つ子を育てる（その5）

――東西南北・子供の躾お国ぶり――

多田三重子
（国際教育研究所研究員）

一、幼時の躾が人間を作る

(1) 祥ちゃんとおせんべい

みかんの籠を手にトントンと、二階の部屋にはいったお母さんは「あっ」と驚きました。

わが子、祥ちゃんは壁に背を寄せ両脚（あし）を投げ出しその間におせんべいを盛ったお盆を置き、一人でカリ・カリと…食べているのです。無表情な顔をして。

近所の子、Aちゃんは、その祥ちゃんに背を向け、片隅のテレビにくっつく程、近寄って見ています。

お母さんは静かな声で聞きました。「どうしてAちゃんと一緒に食べないの？」

祥子「Aちゃんち（の家）で、Aちゃんだけ食べたよ。」

母　「祥ちゃん食べたくなかった？」

祥子「食べたかったよ。」

母　「Aちゃんは今、おせんべ、食べたいかしら？」

祥子「ウン。上げてもいいよ。」

母　「一緒に食べようね。Aちゃんいらっしゃい。」

Aちゃんと祥ちゃんとお母さんは、「おいしいね。」とにこにこ顔でおせんべいとおみかんを食べました。お机の前でお行儀よく……。

お母さんは、Aちゃんのお母さんにこの事をくわしく、話しました。そして二人で子供の躾について話し合いを考え合いました。

①、お八つは出せばよいのではなく、ここでも躾が必要。

②、相手の気持ちを考える優しさは、日常の生活の中で育ったり、またその芽を摘み取ったりもする。

③、お八つを食べる時にも、食事作法の躾があり、いただきます。ご馳走さまと感謝の心も育てられる。

と。また子育ては隣近所の共育（ともそだ）てと実感しました。

その後、祥子ちゃんとAちゃんは前よりも仲よしになっ

て毎日遊んでいる二人とも四才の女の子です。

どの国の子も親達の日常生活の中で育ち、その国々の国民性、いわゆるお国ぶりを受け継いで成人します。

そこで、異国をかけ足で行く旅人の目にふと写る子供の姿からその国のお国ぶりを見ることがあるものです。

(2) ライン河畔の西ドイツの少年

教育関係者四十五名のヨーロッパ視察団の一行は、夏のライン河畔の屋外テーブルで昼食をとりました。友人と私はドイツ人父子と相席となり、こちらは身振り手振りの加わる英語での会話で結構楽しい食事ができました。その席で十一才という少年の姿が強く印象に残りました。

背筋をしゃんと伸ばした肩の線がたくましく、ゆったりとした鷹揚(おうよう)な感じで、こちらの目をまっすぐに見て応答します。ごく自然な態度でスプーンやフォークを使い、残さずきれいに食べました。まさに堂々たる小紳士の風格であります。

ドイツ人は、特に家庭を大事にし、主婦は家庭料理の工夫に熱心だと聞いています。この子も、母の手料理で家族が楽しく食事する時に、マナーも姿勢もきちんと躾けられているのでしょう。それが身について父との国内旅行の昼食で外国の旅行者を感動させる程に育ったのです。

食事の時の箸の上げ下ろしや食べ方・姿勢はその人の品性を表わします。両親が手本を示し、教え言って聞かせ習わせ、慣れさせたいものです。

(3) ロンドンの空港での兄と弟

オランダ行きの便を待つ間の空港で出会った少年は八才で「アムステルダムで医院を開業している両親のもとへ、祖母と弟の三人で行く」とのことでした。

肩を組んで歩いたり、追いかけっこしたりの可愛さに、カメラを向けると、祖母の方をチラと見てうなづき合い、にこにこと応じてくれました。そして少年は上着の胸ポケットから素早く小さな櫛を取り出し、弟の髪にサッサッと櫛を入れ、自分の髪も器用に櫛を当てました。窓辺の椅子に掛けている祖母とまた軽くうなづき合い、弟と並んで…『ポーズ』でした。

さすが、礼儀の国の少年らしい身だしなみの良さと言うべきでしょうか。さわやかに美しい光景でした。

学校の夏休みを両親の家で過ごし、町や村を自転車で走るのが楽しみとのことでした。

また「パパよりもおばあちゃんが　こわい」のだそうで、そのおばあちゃんは、終始、温雅な表情をした上品な老夫人でした。両親に代わって厳しく教え、温かく育て見

守っているのでしょう。

老夫人の人生を通して積み上げられた教養や、英国人としての誇りや責任感が、調和した豊かな人間性が孫達に程よく伝えられているようです。思い出す度に、ほほえましさと感銘とが鮮になるのです。

どの国の子育ても、お年寄りの経験や智恵を頂戴し、先人の築いた文化を後の世代に継承したいものです。

二、国の豊かさ貧しさと子供達

(1) チュラロンコン大学の学生達

東南アジアの旅の終わりに近い日、タイの首都バンコックにある王立チュラロンコン大学に立ち寄りました。広大な構内の中心部にある図書館や木蔭のベンチで、読書したり、三、三、五、五、楽しげに話し合ったりしている多くの学生に出会いました。学生達の態度や表情は知性と理想に輝くように明かるく頼母しげで、やがてはこの国のリーダーとして祖国を背負うエリート青年男女と見受けられました。その夜、私達はある中華飯店で夕食をとったのですが、大食堂の大へんな賑わいの中で先程、図書館で出会った女子大生の十名程がテーブルを囲んでいるのに気付きました。正面の席の恩師らしい年輩の女性を中心に談笑しながら食べています。彼女達の白い長袖ブラウスに黒いスカートの揃いの服装は清楚で若々しく、その知性的な顔をいっそう引き立てています。花やぎの中にも礼儀正しく気品あるこのグループの席は、同国人の視線をも集めていました。夏休みの一日を図書館で過ごし、恩師の教授を囲んで親しく夕食を楽しむ。心に残る旅の印象でした。

王室を中心にチャチャイ首相の政局は安定し年間輸出額も大躍進。国民のGNPもぐんと上昇している国家の、教育面を象徴的に見た思いで、この国の将来が大いに期待されるのです。

(2) ナポリの少年達

私達視察団のバスがベスビアス山を望む景勝の地・ナポリの海岸に着き、一行は口ぐちに海と山と空との調和した絶景に感嘆しながら車から降り立って周囲を眺め渡しました。と、この時、海岸線の彼方から十五・六名の少年の一団が、駆け寄って来ます。私は「子供なつかし」の目で迎えたのですが次の一瞬、ちょっと、たじろぎました。

素足に、シャツも半ズボンも汚れたボロ着。手も顔も泥まみれ。

（ま、海岸で遊ぶ子達だから、はだしも泥も当然）と、心の中でつぶやいた次の瞬間です。子供達は誰彼の区別なくズボンのポケット、シャツや上着のポケットに飛び付いた

り武者振りつき、たちまち、それぞれの獲物を手にし、また一団となってワーッと反対方向に駆け去りました。

その素早いこと、強引なこと、手慣れたこと。

まったく茫然として一同、あれよ、あれよと言う間もない一瞬の出来ごとでした。

ハンカチ、チリ紙、扇子その他の小物で問題にする程の物ではなかったのですが……。

この事件には一種のユーモアを感じます。けれども、これもイタリアの或る貝細工の工場見学での不快さは今も心を暗くする体験です。仕事中の工員が自分の作業机の引き出しからそっと半製品をチラリと見せて取引きをしょうとジェスチャーを示すのです。現金でなくても時計・目がね何でもよいらしいのです。上役の目を盗み同僚のすきをうかがってするあの工員。まだ少年のような顔ながら、暗く冷たく、おどおどした目が私の心を刺しました。

(3) スラム、クロントイの子供達の絵

バンコックの一角、クロントイの小・中学併設校は鉄筋二階建て給食施設も整った近代的な学校、参観の私達には「スラムの学校・スラムの町の子」とは思えない、清潔で明るく、生き生きとした雰囲気でした。掲示された図画の作品も鮮やかな色彩でしっかりと絵具を塗りこめています。構図は簡単ですがどの作品も心をこめて力いっぱいに仕上げています。活発で無邪気な子供達でした。

この町、クロントイはその数、千と言われるバンコックのスラムの一つです。けれどもこの町のたたずまいは清潔で住民は親も子もよく働きお金を貯めて早く普通の町へ転居する希望と目的を持って協力しています。

この町はスラムの天使と呼ばれ、スラム出身の女性、プラティブの聡明で献心的な努力と政府の保護政策によって特異で模範的な町に変身したのです。

・子供は親の生き方を見て育ちます。
・子供は地域社会の習俗の中で育ちます。
・子供は国の政治経済文化の中で、国民として育ちます。

だからこそ、クロントイの子は明かるく伸びのびとして希望に輝く瞳を持っているのです。

社会主義国や開発途上国の経済事情は多くの勤労者が正規の俸給では月のうち三分の一ほどしか生活を維持できず公務員でもチップの強要が半ば公然の行為のようです。

日常生活の困窮は幼い者の心をも卑屈にし、生活規範をも低下させます。次代を担なう国民・わが子がどう育つかそれは、国・社会・親の責任でありその日常の生き方に鍵があるようです。

(平成元年九月十五日)

〈特集〉日教組版〝指導要領〟の問題点

ひとりよがりの「道徳・特別活動」ブックレット

気賀健三
（慶応義塾大学名誉教授）

一、

「教育課程検討委員会」という名称の団体が編集し、「日本教職員組合」すなわち俗にいう日教組が発行所となっている一連のパンフレットが最近刊行された。その趣旨は、本年度から改訂された学習指導要領（幼稚園から小・中・高の学校を包括する）を批判して、教育課程の自主編成のために役立てようというのである。全部で十五冊、各学課目ごとに各一冊を割当てるほかに、総論や指導方法などにも一冊づつを当て、なかなか組織的に行届いた構成となっている。

日教組は、本年三月に改訂指導要領を文部省が公表するに先立って、その原案を入手したのであろう。すでに昨年秋に、機関紙「日教組教育新聞」で改訂予想と称して本シリーズの原文を発表してきたのである。改訂指導要領にもとづいた教科書の編纂は、これから行なわれるわけで、編纂にたずさわる執筆者や発行業者にたいして、日教組は影響力を行使しようとするのがその狙いであろう。周知のように、教科書出版会社は、出版の成績を気にするので、採択に影響力を持つ日教組の意向に注意を払い、日教組に迎合しがちな執筆者をえらび、そして教科書の内容を日教組の意向に沿うものにしがちなのである。

わたくしは、このパンフレットのうち、「道徳・特別活動」編の検討を担当することになり、その内容を調べてみた。

二、

このパンフレットの標題は、「理性と民主主義にそむく道徳教育」となっている。編集者の底意が窺われる題である。日教組のイデオロギーはみずから科学的観察と論理的分析によって真理を求めると自称し、文部省の立場を支配者、権力の立場という風に規定するのが常である。そして

権力への奉仕を求めるものであるから、真理の探求にそぐわないし、民主主義にも背くとかれらはきめつける。かれらのいう民主主義は、人民の立場に立ち、人民の平等を実現しようとするかれらの見方のことをいうものときめこんで、そして支配者の立場と人民の立場とが相対立していると思い込んでいるのである。

わたくしは、日教組のこういう思いあがりというか、ひとりよがりの考え方をはっきりと、一般の教師や教育関係者によく理解してもらいたい。

このパンフレットの編者は、冒頭において、道徳教育への父母・国民の要求が強いことを認めており、その理由、動機を三つあげている。その一つとして、言葉づかいや礼儀など、社会生活習慣の混乱を正すこと、その二は、子どもたちの心の歪みや荒廃を訂さなくてはならないという期待から、そしてその三は、国家社会の支配的秩序の持続的安定と強化のために道徳教育を利用するものというのを挙げている。編者はこの第三の「支配的秩序の持続的安定と強化」のために道徳教育が利用されるのを警戒しなければならないといっているが、ここに日教組の道徳観の特徴がみられる。すなわち、日教組は、「支配的秩序の持続的安定と強化」に反対し、むしろ支配的秩序の破壊をもって、かれらの組織の指導的イデオロギーとしているのである。

三、

パンフレットは、こういう前置きの章に続いて、戦後の文部省の指導方針の変遷を略記している。その紹介は、限られた紙数のため省略せざるをえないが要するに、道徳教育の充実の名のもとに、文部省の型にまとめられた内容が押しつけられる方向に進んでいくことを指摘して、子ども、教師、父母の自発性や自主的協力という道徳教育上のだいじな点が省りみられないのではないかという警戒の文章を記述している。

こうした伏線のもとに、学習指導要領の改訂から、つぎの点をとり出してくる。その一つは「人間を尊重する精神や生命にたいする畏敬の念」である。畏敬とは、単に生命尊重でなく、生命を支配している超越的、神秘的なものを畏れ敬う気もちを意味し、宗教的情操といってよいであろうと解釈し、宗教的情操教育は国公立の学校では認められないはずだと主張するのである。そして教師が宗教教育を強制されることは、思想・良心の自由、信教の自由に反するとさえ書いている。

生命にたいする畏敬の念を子供たちの心に育てるのは、情操教育の一つとして大切なことであるし、それが宗教的信仰への一つのきっかけになることも考えられる。それだからといって、それが思想・良心の自由、信教の自由に反

するなどと思いつくこと自体、狂気のさたとしか思えない。

指導要領で、生命にたいする畏敬の念を説くのは単に生命の尊重のみならず、自然のあらゆる生命現象にたいする子供の関心を深めるとともに、命というものにたいする尊さや神秘さを子供心にはぐくませることである。それは神道とかキリスト教とか、特定の宗教や宗派にこだわることではない。それにもかかわらず、信教の自由の侵害になるなどと強弁する日教組の御用執筆者の心のひがみは厳しく排除さるべきである。かれらはマルクス主義の唯物論の考えを踏襲して、宗教的信条をもって非科学的だと思いこんでいるのであろう。それは十九世紀の科学信仰の遺物にすぎない。

四、

小・中学校の道徳教育で、文部省が重点を置いたもう一つの点は、「民主的で文化的な国家、社会の発展に努め、進んで平和的な国際社会に貢献できる主体性のある日本人を育てる」ということである。民主的、文化的、あるいは平和的という形容詞は、当今流行の用語で、一種の通り言葉で、立場の相違にかかわりなく使われる。わたくし自身はこういう流行語を使いたくない。このパンフレットはこういう表現から、学校教育に、天皇制を持ち込むもので、主体性のある日本人を育てるというのが、郷土愛や愛国心を教え込むものだと推論していく。この推論自体はとくにまちがっているとは思わないが、日教組は、天皇制や愛国心を好まない。かれらはこういう「天皇制、『日の丸、君が代』については国民の間に思想・信条にかかわって見解の重大な相違と対立がある。それにもかかわらずなぜ公教育で強制するのか」と問いかける。そして思想統制だといってこれに反対するのである。おもうに、日本国法にしたがい、日本国として独立を保ち、自由を享受する日本人として当たりまえと思われていることを、思想統制だといい張る教育者がいればこそ、文部省として、こういう学習指導要領で的確に日本人としての主体性を規定する必要がでてくるのである。

このパンフレットはまた学校教育全体を通じて道徳教育を行うべきことを指示している文部省の考え方に反発している。学校教育全体を通じてという方針には、さすがに反対していないが、たとえば社会科なり国語科なりで、「神秘主義的な心情と天皇崇拝を媒介として」、「合理的批判精神なしの愛国心の指導を強制しようとしている」といって反対する。パンフレットの編集者は、学校教育全体という場合に、「教え、学びあう関係を人間的まじわりと民主的な関係にすることによって、人間尊重と民主主義への価値

意識と行為能力を育てること」と、実にもってまわった表現で日教組イデオロギーを持ち込んでいる。

改訂学習指導要領は、特別活動の中で、卒業式や入学式の際に、「日の丸・君が代」の掲揚・斉唱を指示している。新聞などでもわざわざ話題になったもので、これまで「望ましい」と表現していたものを明確に実行させるように表現を改めたのである。パンフレットの編集者はこれを「反人権・反民主主義的性格」が端的にあらわれていると不満を洩らしている。過去の戦争の不快な思い出につながるので、現行の国旗・国歌を感情的に嫌う気持が、かれらにはまだ残っているのかもしれない。だがそれをもって、国旗・国歌を排斥するのは、分別がない仕業である。あるいは過去の軍国主義を思い起こさせるというものがいるかもしれない。それも感情にとらわれた考え方で、今日の日本はそれと無縁であり、国旗・国歌もそれとは無関係なのである。

日教組は、かれらの階級的イデオロギーにとらわれ、それから今にいたるも離れられない。十年一日のごとく、反体制的であり、いつ実現するともわからぬ社会主義を想像上の目標にして、議論を立てるのである。かれらの考える民主主義はただ平等ということであり、そして現体制を資本主義とみているので、この秩序を維持している国家の権力や現秩序の存続に役立っているものに反抗する気持がしみわたっている。こうした偏った考えから、文部省の教育方針を自分たちのイデオロギーにしたがって批判する姿勢をとる。それをもって合理的とか批判精神という風な言葉で自己満足におちいっているのである。

教科書の出版事業に志すひとたちが、こういうイデオロギーに服従している集団のために教科書内容を考慮するとすれば、日本の不幸としかいいようがない。

（教育正論第35号より転載）

現代に見る間接侵略・革命（十八）

狩野信行
（日本軍事史学会監事）

（三）ポルトガル革命（つづき）

共産党の孤立化とゴンサルベス首相の失脚（つづき）

一九七五年八月中旬頃から、果敢に打って出たポルトガル共産党の、各種の巻返し作戦は、どうも巧く行かなかった。八月十九日からの政治ゼネスト不成功についても、前に述べたとおりである。更に、北部を牙城とする反共保守勢力に向けて、「捨て身の戦法」として試みたオポルト大集会は、同地で共産勢力とカトリック勢力との衝突を惹起させ、死者六人、負傷者二百人の犠牲者を出し、共産党は遂に同集会を中止させると言うハメに追い込まれて了った。守勢に立たされた共産党が、力を誇示して、社会党らを妥協に応じさせると言う、先きの局面打開作戦は、このようにして失敗に帰し、共産党は大変な打撃を受ける反面、反共勢力を勢いづかせて了うこととなった。

このような緊迫した情勢下の八月二十九日、ゴメス大統領は、ゴンサルベス首相を更迭し、後任にアゼベド海軍参謀長を任命した。が同時に、ゴンサルベス将軍を国軍総参謀長に任命した。この人事措置は、国軍運動穏健派・非共産極左派と社会・人民民主両党への政治的妥協であったが、ゴンサルベス氏の国軍総参謀長就任は、軍内親共派による軍事権力再掌握への布石としての意義を持ち、親共派にとっては、言わば〝一歩後退、二歩前進〟とも見られる事態であった。従って、この措置は、既に激しくなっていた軍及び国軍運動内部の抗争に、油を注ぐものともなった。

翌日、アンツネスら穏健・中道左派系将校達は、「軍の八十パーセントは、われわれの指揮下にある」と、権力奪還の姿勢を誇示し、ゴンサルベス共産系将軍の「国軍総参謀長就任を拒否する」と声明した。続いて従来、左派系・ゴンサルベス派と見られていた、シルバ空軍参謀長とファビアン陸軍参謀長が、同就任を拒否する声明を発表するに到った。更に国軍運動親共派が、再度の巻返しを企図し

た、九月五日の「国軍運動総会」開催を前にして、陸軍及び空軍は、代表者会議なるものを開いて、同総会をボイコットすることを決議した。この為、軍は既にゴンサルベ支持を決定していた海軍と、陸・空軍の二極に分裂し、内戦の可能性さえ高まってきた。そして九月五日、「国軍運動総会」が陸・空軍代表者多数の不参加と言う状況下で変則的に開催されたが、何と同会議でもゴンサルベス共産系将軍の革命評議会議員の解任が決定されて了ったのである。ここに到ってゴンサルベス将軍は、「内戦を回避するため国軍運動の指導的立場から身を引くことに決した」と自ら述べて、国軍総参謀長辞任を表明した。遂に軍隊内部の抗争は、反ゴンサルベス派の勝利に終ったのであった。

同将軍は、軍内親共派のシンボルであり、共産党が国軍運動と連携して革命を遂行すると言う、新しい革命形態を追及する上でのカナメの役割を果たしていたので、同将軍の失脚は、共産党にその革命路線の手直しを迫る重要な契機となったのであった。

アゼベド内閣の発足

ゴンサルベス将軍の失脚後、ゴメス大統領とアゼベド新首相は、混迷を深めている政局を安定させ、経済危機の克服等当面する諸課題に対処するために、「挙国一致軍民連立政府」樹立を提唱し、社・共両党を始めとする主要六政党と個別協議を開始した。

社会党は、同党に有利な政治情勢の展開を背景に、政治権力の主導権を一挙に獲得する為、入閣の条件として、「制憲議会による新憲法制定から六十日以内に立法議会選挙を実施すること」「社会党系機関紙〝レプブリカ〟、カトリック系放送局〝レナセンサ〟の管理の復元等、言論・報道の自由を保障すること」等を提示した。

一方共産党は、これには直接応えることなく、新内閣の所謂右傾化を牽制する戦法を取り始めた。即ち同党は、制憲議会選挙第二党の人民民主党が「国軍運動の解体を策し、ポルトガル国民に反革命武装蜂起を呼びかけている」「農地改革や企業の国有化等革命的諸政策に反対している」と激しく攻撃し、社会党と人民民主党を分断して、中道右派勢力及び保守勢力の台頭を抑えつけるとともに、その具体策として、人民民主党の新内閣入閣阻止を図ったのであった。

九月十九日、ゴンサルベス首相が辞任に追込まれて以来、約三週間ぶりにアゼベド新内閣が発足した。新首相は、「新内閣は、共産党、社会党、人民民主党三党と、国軍運動の協力を基盤として構成され、社会主義を基本目標に掲げ、政治的民主主義を堅持しつつ、革命の擁護・推進に当る。更に地方自治体、労働組合連合を民主的に改組

し、報道機関の複数主義を保障する」等を強調した。社会党は、外国貿易、農業・水産、大蔵、運輸・通信の経済主要閣僚ポストの四つを占めたが、共産党は社会施設相の一ポストしか与えられなかった。

一方、軍隊内部の動きであるが、ゴンサルベス将軍の失脚は「軍の団結に貢献したとは言えない。分裂はなおも続いている」（カルバリョ将軍）と言われるように、軍内穏健派が実権を掌握しながらも、海軍を中心とする親共派や非共産極左派は排除されておらず、依然不安定であることに変りはなかった。更に経済危機は、何ら解決されず、むしろ悪化の一途を辿っており、又従来極めて政治関係や経済関係も緊密であった隣国スペインとの国家関係は悪化を続けており、情勢好転の兆しは尚も見られていない。それ故に、「挙国一致軍民連立政府」樹立によって、政局は一応小康状態を保つに到ったものの、転機を迎えたポルトガル革命が、このまま社会党主導で漸進的に、民主的な社会主義の道を歩んで行けるのか否か、疑問視せざるを得ない状況が続いたのであった。

キ　極左の反乱

遂に政治的・軍事的暴発が、十一月二十五日に起った。即ち極左派・左派将兵の混ざり合った一降下部隊が決起して、リスボン地区の主な空軍基地五ケ所を占拠し、この鎮圧に向った部隊との間で、銃火を交えるに到ったのである。

そもそも九月十九日のゴンサルベス左派・共産系内閣崩壊以来、重要ないろいろの事件が起こっていた。とくに労組内に圧倒的な勢力を持つ共産党が、相次ぐデモ攻勢をかけて新設のアゼベド中道内閣をゆさぶり続け、これらのデモに極左派の労働者・兵士らが同調していたから、たまらなかった。例えば十一月十二日には、建設労働者約二万人からなるデモ隊が、四十パーセントの賃上げを要求して、国会議事堂を包囲、中にいたアゼベド首相と議員らを略々二日間に亘って閉じ込めて了った。このとき政府は、デモ隊鎮圧のために全土治安作戦司令部（ＣＯＰＣＯＮ）に出動を要請したけれども、極左系の首領カルバリョ将軍はこれを拒否、為に止むなく同首相らは、包囲を解かせる為に、労働者達の要求を呑むはめに陥ったものであった。

このような左派・極左派混在のたび重なるデモによって、首都リスボンは混乱し、アゼベド首相、ソアレス社会党書記長ら穏健派は、首都を離れ、保守色の強い北部へ移らざるを得なくなった。そして十一月二十日、同首相は、軍の支援が得られるようになる迄、政府の機能を停止すると言う前代未聞の〝政府のストライキ〟を発表するに及んだ。これに対して共産党は、すかさず「機能を停止するこ

とによって、アゼベド内閣は事実上辞職した」として、人民民主党を除いた次の新内閣を作るよう軍事評議会その他に呼びかけた。この時点においては、社会・人民民主両党と共産党ら左派・極左派の立場は、今や再び逆転し、穏健派がゴンサルベス前首相を追い落とした時の、逆の状況に戻ったかのようであった。

革命評議会による調停

そこで、その時点における（最高委員会は崩壊していた）最高権力機関である革命評議会は、十一月二十一日、調停案として、①アゼベド政権が、最近作った政府直属部隊は解散させる②既に活動停止となっている共産系のプロパガンダ担当機関たる国軍参謀部第五課を復活させる③その代りにカルバリョCOPCON司令官のリスボン軍管区司令官の兼務を解き、新たにロレンソ大尉（穏健派）を将軍に昇格させて、その後任に据える。と言う案を出した。しかし、左派・極左派は勿論のこと、対する穏健派もこの提案を受け取らなかった。又カルバリョ将軍の首都軍管区指揮権の委譲について、同管区の各部隊司令官が会議を開いて、これが拒否を決定してカルバリョ支持を表明、一方、リスボンの共産系労働者達もアゼベド内閣が倒れる迄は、毎日二時間づつのストを続けると発表した。

革命評議会は、調停案再検討のために十一月二十四日、緊急会議を開催、十一時間に亘る徹夜会議の末、翌二十五日早朝、「カルバリョ更迭、ロレンソ任命を再確認する」旨の声明を発表した。因みにポルトガルには、リスボン軍管区の他に、北部・中部・南部の計四つの軍管区があるが、首都以外の軍管区司令官はすべて穏健派で占められていた。カルバリョ将軍がCOPCON司令官に留まるにせよ、残りのリスボン軍管区司令官の座を追われれば、全軍管区が、文字どおり穏健派に独占されて了う。このような危機感から、左派系降下部隊の二十五日早朝の反乱となったのは間違いなかった。

反乱軍と鎮圧側

反乱軍は、二十五日〇四〇〇行動を起こして、タンコスの降下部隊司令部、モンサントの管区空軍司令部、リスボンの空軍総司令部を含む計五つの空軍基地とラジオ・TV放送局を占拠した。

ところが彼ら兵士達は、これらの行動をテキパキと片付け、空軍司令官らを監禁してから、始めて他の友好部隊に連絡を取り、支援行動を要請したと言われる。即ち、一部極左派部隊のみの決起だったのである。

（つづく）

郷土の城（28）

山形新庄城

幕末兵火により炎上

佐々木　信四郎
（城郭学者）

一、新庄の地

新庄は最上川をさかのぼった新庄盆地にある。

最上地方は戦国末期には、清水・鮭延・細川（後に小国）の三つの豪族の勢力によって支配されていたという。

山形に本拠をもつ最上氏は次第に勢力を広げて、最上義光に至り庄内地方も平定し、慶長十九年（一六一四）義光没して家親が跡を継ぐと、一族の清水義親を滅し、その遺領は最上氏の臣日野将監が支配する処となって、新庄にその本拠を構えた。

元和八年（一六二二）最上氏は徳川幕府によって改易され、その遺領は鳥居忠政（山形二十四万石）・酒井忠勝（鶴岡十四万石）・戸沢政盛（新庄六万石）・松平重忠（上山四万石）などに分けられ、新庄は戸沢氏が領することになった。

二、戸沢氏の入封と新庄築城

戸沢氏は平氏の出といわれ、秋田仙北郡あたりに勃り、次第に勢力を得て、応永年間に角館に居を構えたといわれている。

天正十八年（一五九〇）には戸沢盛安は秀吉の小田原攻城に参戦し、小田原の陣中で没して光盛（盛安の弟）が跡を継ぎ、領国は秀吉により安堵された。この光盛も秀吉の朝鮮出陣のおり、肥前名護屋に向う途中姫路にて病没し、当時八才の戸沢政盛が跡を継いだのであった。

この政盛は秀吉没後徳川家康に近づき、慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原の役には、上杉氏の部将直江兼続を攻め、その功によって常陸松岡四万石に封ぜられた。

その後政盛は大坂の両陣にも徳川家に協力し、最上家取潰しの後、戸沢右京亮政盛は新庄六万石として鮭延（さけのべ）城（真室城・真室川町）に入城した。

しかし鮭延城は領国支配の地としてはやや北に偏り、また狭隘であったので、幕府の許可を得て現在の地に新城を築くことに決定した。

なお石高は寛永二年の検地で、六万八千二百石となった。

新しい城は日野将監の居館跡に構築したものであるが、その規模は大きく、寛永二年（一六二五）には完成した。

城の縄張りは政盛の義兄山形城主鳥居忠政（政盛正室の兄）が当ったといわれている。

本丸は東西五十二間、南北百二十七間で、水濠で囲まれている。

創建当時は三層の天守と三基の二層隅櫓があった模様である。

本丸の南に二の丸内屋敷があり、これも濠で囲まれ、この外に二の丸及び三の丸があり、土塁と水濠で囲まれていた。

城は完成後短い間に二度の大火に見舞われ、天守は寛永十三年（一六三六）に侍屋敷からの出火で焼失し、その後再建されることはなかった。

三、幕末の新庄城

戊辰の役（一八六八）には東北諸藩は奥羽列藩同盟を結び、庄内・仙台などの大藩に狭まれた新庄藩もこれに加盟し官軍に抗した。

しかし十一代藩主正実の母が薩摩島津藩の一族の出であるゆえもあり、政府軍にくみする秋田藩と密約を交わし、官軍についたため佐幕の同盟軍は敗退した。

やがて庄内・仙台の軍は陣をたて直し、新庄城に入っていた官軍に向って城下に攻め入り、各所に火を放ち、城は焼け落ちて遂に新庄城は陥落し、城下町も大部分失われた。

一時秋田に退いた政府軍も再び攻勢に転じ、官軍の勝利に終り、藩主も城にもどった。

近世初頭の創建以来兵火に会わなかったこの城も、幕末には激戦となって全城火に包まれて落城するという悲劇を味わったが、幕府方会津若松城の悲話に隠れた城の悲しい末路であった。

明治初年の絵図によると二層櫓二基が残存していた。

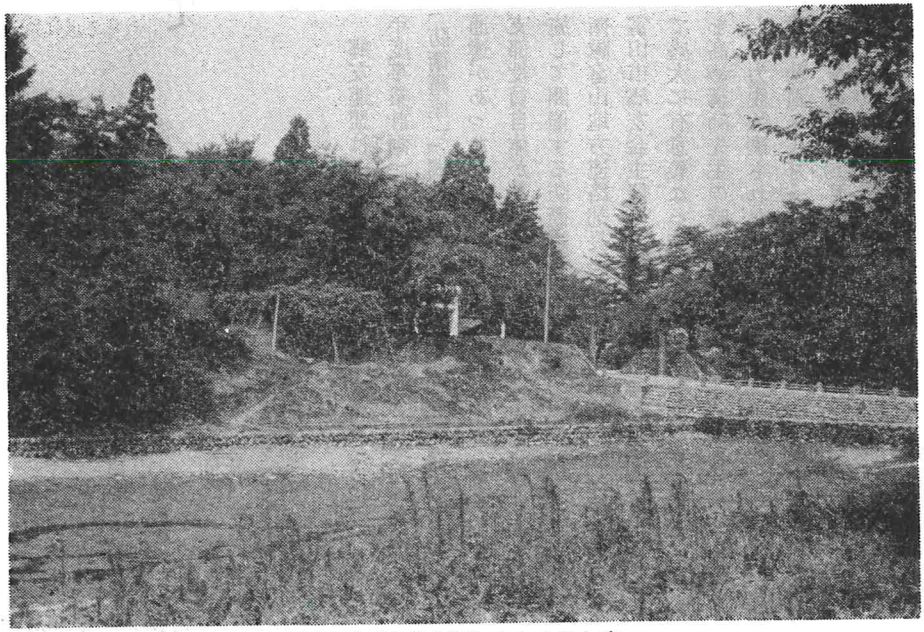
四、現在の新庄城

明治に入り城域は兵部省の所管となり、明治六年に学校敷地として使用が認められ、また招魂社（後の護国神社）も建立された。

また郡役所や戸沢神社も造営された。

現在は土塁、濠に往時をしのぶのみではあるが、城趾は市指定史跡となって公園として開放され、天満宮などとともに市民の憩いの場所となっている。

新庄城（市指定史跡）本丸桝型門跡



新庄城（市定史跡）本丸土塁と濠

防衛講演会の開催に因みて

瀬川時造
（富山県支部副会長
連盟本部副会長）

郷友連盟は本年五月十八日郷友連第五号を以て「平成元年度事業計画」の重点を注ぐ活動として「防衛講演会」「防衛講座」「郷友塾」の本年度実施計画の提出についてご通達があった。県支部管内に在住せられる講師の招聘や県支部役員自体が講師となって県下郡市町村郷友会を巡回実施して開催する防衛講演会は六月企画を立て、第一回は自衛隊富山地方連絡部長一等陸佐松浦征七先生を講師として富山市郷友会主催の下に、富山市公会堂別館ホールに於いて盛大に有意義なる防衛講演会を開催し、会員の防衛意識を高め講師先生の時局の推移を憂え防衛の整備急務なることを力説強調されたる感銘より県支部主催の防衛講演会開催の計画を八月一日県支部第三回理事会に諮り満場一致の賛同を得て、九月二十三日秋分の日を卜し部内会員のみならず広く友好団体にも参加を呼びかけて開催することに決

定し、大いに力を得て開催当日を心待ちに待った。

時恰も九月二十三日は秋分の日であり祖先の御霊を敬弔し平素の御加護に感謝し慰霊すべき日であり、我々郷友会員としては殉国の御英霊に参拝し曾っての戦役事変に於て一身を君国に献げ今日の平和を築いて下さった戦友の御霊に感謝の赤誠を献げる日でもあるので、此の日を富山県郷友会主催の防衛講演会を開催すべき有意義の期日と定め、農家は稲刈りの繁忙なる時機でもあったが、午前十時より富山市新総曲輪富山県民会館三〇四号室に於いて県下各界の有志を来賓として招き、日頃懇意に相提携し祖国愛精神に燃え運動を展開しつつある日本を守る富山県民会議、スパイ防止法制定促進富山県民会議、富山県偕行会、富山県傷痍軍人会、富山県軍恩連盟、富山県金鵄会、富山県北方領土返還要求県民会議、富山県海交会、富山県銃剣道連盟、富山県神道政治連盟、仏所護念会等の友好団体にも参加を招請し、各種支援団体の絶大なるご支援も得て、約二百名のご参加を得て日本郷友連盟会長前参議院議員堀井正夫先生を講師として招聘し、いとも盛大に防衛講演会を開催した。

午前九時三十分より受付開始、定刻午前十時開会瀬川県支部副会長より開会の辞が述べられ、県支部常任理事見浦丈輔司会者となり、正面の国旗に一同敬礼し、国歌を斉唱、殉国の英霊に黙禱を捧げる。続いて大野富山県支部会長より挨拶が行われ、県下各界代表より来賓挨拶を受ける予定の処、時間の関係上割愛して各来賓の代表として自衛隊富山地方連絡部長一等陸佐松浦征七殿、スパイ防止法制定促進富山県民会議々長黒坂富治殿の二名の方にご懇切なる祝辞を賜った。午前十時三十分連盟副会長瀬川時造講師を紹介し講演に入る。

演題は「日本の安全保障の現状と問題点」と題し、講師堀江正夫会長先生より一時間余に亘る烈々として燃ゆるが如き愛国のご熱誠溢るるご講演は参加者一同に多大なる感銘を与えた。我が国の学校教科書の偏向、旧連合軍が我が国に押し附けた現憲法や極東軍事裁判史観に依る我が陸海軍が正義に燃え只管に祖国防衛の為身命を君国に献げて戦った明治以来の尊い聖戦を侵略戦争ときめつけ、防衛問題を真剣に学習検討するの誠意なく国防をタブー視し、罪悪視し、現代の著しく偏向せるマスコミの報道等に依って国防思要を喪失し、唯物万能主義、自己保身、権利のみの主張に走り、或は享楽的堕落に走る今日の世相風潮の醸し出されている現代世情に対し貴重なる覚醒と新しい信念と決意が喚起され、誠に有意義なる堀江会長先生のご講演を拝聴し、参加者一同に尊い教訓と使命感が示唆されたことを喜び、ご講演の結びに満場の拍手が送られた。引き続き質

疑応答に移り、時間の関係にて質問者を三名に絞り、講師先生より明快なるご答弁があり、質疑を終って午後零時十分友好団体を代表して富山県偕行会長山沢佐一郎先生の音頭にて「日本郷友連盟」の万歳を声高らかに三唱した。午後零時二十分県支部副会長松本義雄氏の閉会の辞が述べられ盛大裡に滞りなく防衛講演会を終了した。

今回の防衛講演会の開催に当り連盟本部より多大なるご援助を仰ぎ、亦堀江会長先生は内外に隈なく疾駆せられ繁忙多端の折柄にも拘らず本県にご来臨を賜り講師としてご熱誠溢るるご教導を賜わりましたこと会員一同深く感謝申上げる所であります。

附　記

今回の堀江会長先生のご講演を拝聴し所感の一端を述べさせて頂き度いと存じます。

㈠、防衛に関心を持ち防衛予算の獲得や勉強会に参集する国会議員の数は格段に増加することは誠に喜ばしいことであるが、防衛について真に見識を持ち行動力を発揮して政治的にリーダーシップを発揮する議員の数は比較的な少いのは熱意の不足か其処に至る見識の不足かでありますが、見識の不足とすれば議員に対し特別教育を施す教育機関の設置が望ましいと思う。

㈡、激動する国際情勢特に巧妙なる間接侵略に眩惑されている現状に鑑み、現代の戦争勃発は洵に予断を許さざるものあり、政府の防衛に関する基本政策の大部は旧態依然であることは非常に危険であり、正面装備における質と量に加えて特に即応性、継戦能力及び後方面に猶多くの不備を抱えている現状に鑑み、現自衛官に係る政策の早急なる改善と平時から一般国民も国家防衛の責務あることを意識せしめ、且つ訓練するための民間防衛の法制化と組織態勢の確立が必要と思われる。

㈢、我が国の周辺に於いてはソ連の北方四島を今猶返還するに至らず、却って北方四島を中心とするソ連の軍事力は増強され、亦東南アジアに於いては中越紛争南沙海戦の実態があり、西側の防衛シーレーンは正に東南アジア海域に於いて封鎖されんとする現状に在り、ソ連の所謂極東回廊の戦略は今日マスコミの報道される東西二大陣営の接近、ゴルバチョフの世界平和政策の報道とは全く異るものあり、曾ってソ連ミグ23号の我が北海道に不時着した際の我が自衛隊の対応として当時栗栖統幕議長の決断した緊急の措置の実例より見るも、シビリアンコントロール機能は猶改善を要するものが窺われる。政府の決断指令を待つの暇なき緊急時に於いては現地自衛隊陸海空を統轄する軍部指揮官の裁断に一任する法的改正も必要であると思う。

(四)、内閣には国防に関する重要事項及び重大緊急事態への対処に関する重要事項を審議する機関として安全保障会議が置かれているが右の如き場合においては事後承認を受くる制度に変更せられては如何であろうか。

(五)、シビリアンコントロールは占領政策を主目的とした現憲法下誠に止むを得ないが先生の仰言る通り今の体制では、軍事戦略面について全く素人の文官が国の安危に係る基本についても権限と責任を持つということであり大変な問題である。

旧陸海軍省、参謀本部、軍令部に代る確乎たる軍事専門の優秀なる指揮官戦術家を養成し其の要衝に当らしむべきであると思う。

自主憲法の制定を待つの外はないが、有事は何も予報あるものではなく、即発のものである。現制度の内容を知らないで自衛隊が在るから大丈夫と安眠している国民は誠に気の毒なものであると思う。

郷友連盟の果すべき使命は此処に在ると思う。現行の制度は余り複雑過ぎて有事大禍乱の起きた場合責任転嫁という様な事態が起らないだろうか。

(六)、海外派兵は行わない

ペルシャ湾から石油を内地に輸送して始めて日本企業は産業を継続できる。先に申し上げた東南アジアの海峡を通る西側の防衛シーレーンを守らないでそれで他の国々友好国に義務が果せるのか。速かに派兵できる法を望む。

(七)、精強なる自衛隊の育成のため孜々として自衛隊の諸官が努力されていることは、同盟国米国からも我が自衛隊の練度が高く評価されていることである。誠に同慶に堪えません。自衛隊の航空機、戦闘機の緊急発進のあの祖国を思う真剣なる表情は全く旧軍の特攻隊そのものであり、矢張り大和民族の血潮が流れている。自衛隊員が胸を張り大手を振って歩ける様国民各層も常に激励しなければならぬと思う。亦隊員募集も大いに協力しなければならない。

(八)、政府が自衛隊の地位自衛官の身分処遇、文官統制下の文官と自衛官の関係等まで徹底的にメスを入れ改善を図ると共に我々国民としても自衛隊広報を活潑化して行かねばならないと痛切に感ずるものである。

(九)、伸びんとする草に障害となる雑草が生え其の成長を妨げているものは何か。反国家陣営である。此の雑草を取除くためにも不断の創意工夫と根気強き努力に依り雑草即ち間接侵略巧妙なる潜伏活動の阻止に努力して行かねばならない。

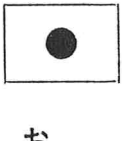
(十)、有事法制の整備に就いて聞き及ぶことは我が自衛隊創

立以来四十年を経ていまなお有事法制が整備されていないことである。

防衛庁は昭和五十二年以来有事法制の研究を進め、直接自衛隊に関連するものについては防衛庁所管に係る自衛隊法の改正とこれに伴う細部準拠や、他省庁に係わる有事自衛隊に認められる権限行使のため手続事項等の細部準拠については概ねその研究を終り、その問題点を確認しているがこれを法制化しようという意図は未だ認められないと言われるが、いうまでもなく日本の有事は国内戦であり、必然的に国民を巻き込むことになる。この際重要なことは作戦目的達成の行動が国民の自由、生活に制約を加えることとならざるを得ない面が生ずる。このことは有事国民の協力を得るためにも平時からよく国民に理解して貰っておくことが必要であるという問題を提起している。堀江会長先生は参議院議員としても十二年間在任せられ誠に識見豊富であり、信念に燃えて講演されたご講演は又と得られない貴重なるご講演内容を拝聴させて頂いた。斯る尊いご講演の中から我々郷友会員が平素から心掛けて自衛隊のため、国家安全保障のため支援協力しなければならぬ問題は山積していると思われた。家庭や地域社会の人々特に戦友学友職場の友等互いに語り合い、自分でできることは精々生涯奉仕のため力を尽くし、特にマスコミや反国家陣営に阻害され国防意識の揚らない欠陥は私達郷友連盟の日常活動において之を補い、更に一層郷友活動の成果を挙げて行き度いと念じて止まぬ次第である。

（完）

自衛官募集



男子自衛官

二等 陸・海・空士

○年令　一八才以上～二十五才未満

○初任給　一一五、八〇〇円
（食事、宿舎費は無料）
（寝具等は支給又は貸与）

○ボーナス　年三回、四・九ケ月分

○技術　各種国家技術免許取得の機会があります。

お問い合わせ

東京地方連絡部電話〇三（二六八）三一一一
又は、各都道府県所在の地方連絡部へ

平成元年度「幹部・青少年部全国研修会」について

◇概況報告

矢部　廣武
（連盟副理事長）

今年も昨年同様、研修会は静岡県御殿場市の陸自・板妻駐屯地、軍神・橘中佐ゆかりの第三十四普通科連隊のご支援のもと、八月十六日から三泊四日の日程で実施されました。

参加人員は企画・指導教官である私以下三十六名でした。青少年研修員は総計二十名で、そのうち各支部から派遣された者は静岡三、石川二、東京、広島、愛知、奈良各一。また本部直轄研修員は十名(防衛講座参加者)でした。

研修の目的は、「国の安全保障、特に防衛問題を中心に教育し理解させるとともに規律ある自衛隊生活及び厳しい訓練を体験させて体力・気力を練成し、青少年部活動の中堅指導者たるべき人材を養成する」ことにありました。

従来オブザーバーとして参加した中高年者は、本年は「幹部研修員」の名のもとに一個班を編成し、「郷友理念の拡大と青少年部員に対する指導能力の向上」を狙いとして研修することとし、一部別課目を取り入れました(若干不徹底の嫌いあり、来年更に改善の余地があります)。富山県の瀬川さん、石川県の今村さんなど、連続参加の方々には深く敬意を表します。

幸い天候にも恵まれて予定した課目をすべて消化でき、所期の目的を果たし得て、各研修員とも満足して離隊した

であろうと思われます。ここに改めて、諸事ご多忙の中にもかかわらず、二年連続して本研修を引き受けご支援を賜わった、三十四普連の石飛連隊長以下教育隊の皆さん、並びに衣食住のお世話を頂いた駐屯地業務隊の皆さんに心からお礼を申し上げます。

また今回は第二日目に航空自衛隊の浜松基地研修を行い、日本の空の守りに対する信頼感を深めることができ、まことに有益でした。基地司令以下関係の皆さんに対し厚く御礼申し上げます。

次に、本研修に参加した人たちから所見を頂いたので若干を披露します。

◇所見

青少年部研修員　森垣　秀介
（連盟参与　国防問題研究会代表）

短期間であったが、その中身は極めて濃く、「心技体」の健全な育成のための素晴らしい研修であった。主なカリキュラムは次のとおり。

(1)豊富な講話。連隊長の「防衛雑感」、福岡理事の「航空自衛隊概説」、大河内理事の「古戦史講話」、矢部副理事長の「橘中佐」など、有意義な講話の連続に堪能した。

(2)実技訓練。基本教練、徒手格闘術、銃剣格闘術、応急救護訓練等を通して、団体行動における規範、礼節、心構えを学ぶ。

(3)浜松基地見学。本年の目玉の一つであり、丸一日かけて研修した。防空システムや救難システムについて詳細・具体的な説明があった。要撃戦闘機F―15や純国産の中等練習機T―4を目のあたりにし、その迫力に圧倒される。

(4)体力検定。百米走、ボール投げ、走り幅跳び、懸垂、千五百米走を実施したが、最後の千五百では平素の怠惰を強く反省させられる。

(5)十五キロ徒歩行進。最終日の朝、非常呼集で五時起床。服装を整え、連盟旗を先頭に隊列を組み、さっそうと出発。東富士演習場内の道路を、重さ二十キロの背のうを背負い四時間半かけて踏破する。途中でとった朝食のおいしさは格別。背中に背のうが食い込み、列に乱れが出始める頃、奮起を促すように矢部副理事長指導の軍歌演習が始まる。全員歯を食いしばり、十数曲の軍歌を腹の底から歌い上げ、自らを励ました。

和やかな中にも厳しく、そしてすがすがしい四日間は瞬く間に過ぎてしまった。この感慨を胸に、「祖国の発展」のため一層献身する覚悟を固めた次第である。

◇所見

青少年部研修員　松村　博司
（防衛講座参加者　国防研会員）

七月の参議院選挙では、非武装中立を標榜する社会党が大躍進を遂げた。今後、自衛隊や防衛力整備に対する風当たりが益々強まることが予想される。そのような時、現下の情勢を憂慮し国家存立の基本である防衛問題を正しく理解し啓蒙に努めようと志す三十六名の仲間が、板妻駐屯地に集まった。

一連の教育課程を終えて印象に残ったことは、自衛隊での規律の厳格さである。特に、宿舎内の整理整頓の不出来を助教の方から咎められ、家庭における躾の欠如を指摘された時は、まことに恥ずかしい思いをした。自衛隊員の生活は起床から消灯まで実に秩序立っており、一般社会との差異を感じずにはおかない。

自衛隊員とは対照的に、巷に溢れる若者たちの退廃的な風俗や道徳心の欠如ぶりには、ただあきれるしかない。しかし、これは若者に限ったことではない。本来、国民の鏡となって高い道義心を堅持すべき政治家たちによる汚職、食言、果ては女性スキャンダルなど、全く困ったことだ。

戦後、わが国民は奇跡的な復興によって未曾有の物質的繁栄をかち得たが、同時にその副作用ともいうべき精神的空白の中に埋没し、ひたすら安楽をむさぼる惰弱な民族へと落ち込んでしまったように見える。かつて「東洋の君子国」と自他共に認めていた祖国日本は、一体どこに行ってしまったのであろうか。その片鱗は、自衛隊にしか残っていないのではなかろうか。

今後、一人でも多くの人が体験入隊等を通じて自衛隊と接し、自らが日本の良き伝統・文化・歴史の継承者であるとの自覚を新たにすることを切に望むものである。

◇所見

幹部研修員　今村　勉
（石川県支部副理事長　兼青少年部長）

日本の平和、そして世界の平和を誰よりも願い、心身を平和のために捧げ日夜訓練に励んでいる自衛隊員諸氏。その実情を少しでも理解するとともに、わが日本郷友連盟の組織と理念をも理解することを願って催される「幹部・青少年部全国研修会」。

これに参加している若者に尋ねてみると、「口先で、〝平和々々〟と唱えながら何にでも反対するのが野党の常套手

段です。そんなことで本当に平和が得られるなら、これほど楽で安上がりなものはない。それができないから苦労があるのではないでしょうか」と問い返してくる。自衛官については、「私たちに代わって国の守りの責任を負ってくれている自衛官に、深く感謝している」と言う。

そのような彼らはこの研修の中で、重さ二十キロの背のうを担いで、早朝の山道を汗を流しながら根性で歩き続けるという素晴らしい体験もする。彼らはまた、国内外の情勢や、政治、経済、軍事などの諸問題について、実によく勉強している。ただ〝平和々々〟と叫んでいる野党やその同調者たちに比べて、どちらが真の平和愛好者なのだろうか。ろくに話も聞かずに反対だけを叫ぶ人たちに、彼らの〝爪の垢〟でも飲ませてやりたいくらいだ。

最後に、本研修を快く受け入れ絶大なるご支援を賜わった三十四普連の皆様に厚く御礼申し上げます。

狂った教育
（高校と大学だけが教育か）

原田雲心
（東京都支部会員）

○　館内喫煙
先生「スパーリ・スパーリ。
生徒「先生、館内は禁煙だろう。
先生「うん、ほんとはな。スパーリ、スパーリ。
生徒「？……。

○　ラブホテル
先生「夜間の星の運行を調べて来なさい。
生徒「おれんちのまわりはラブホテルばかりで星の動きなんかわからんよ。
先生「？……。

○　走行中のバス内
子供「キャッ、キャッ。バタン、バタン。
母親「そんなに騒ぐと運転手さんに叱られるよ。
運転手「運転手じゃなくて母親だろう。
母親「？……。

○　歩道上の走行自転車
老女「痛い!!。
ぶっつけた中学生「気を付けろ!!
老女「まあ!?……。

○　注意書
子供「キャッ、キャッ。ドタン、バタン。
仕事士「そこは危いから遊んじゃ駄目だよ。
子供の父親「そんなに危けりゃ注意書を貼っておけ。
仕事士「そんな小さな子供に注意書が読めるか？。
父親「――。

○　利子
主人「オイッ、ちょっとたてかえておいて。
女房「子供に借りときな。
主人「オイッ、二、三日貸しときな。
子供「利子は一割だぞ。
主人「!!。

○　放置自転車
老女「道路上に自転車を置きっぱなしでは家の出入りも出来ないじゃないの。
塾通いの学生「この糞ババア!!　お前んちの道路か!!。
老女「まあ、なんという子供達だろう。こんな子供が塾通いしてなんになるんだろう？……。

○　男性の化粧
紳士「男性が化粧してどこえ行くの？。
若者「そんなこと、勝手だろう。
紳士「昔の武士は戦場や殿様の前に出る時は化粧したそうだが……。
若者「オレは彼女が待っておるんだ。
紳士「!?……。

（元、九、一二）

郷友基金

醵金者ご芳名

（通算第6回目）（受付順 敬称略）

（本部扱）

十万円　寺崎隆治

力石禎一

○―○―○

（富山県支部扱）

瀬川時造ほか八十六名

（静岡県支部扱）

富士奉公会（二十六名）

（石川県支部扱）

鍋島弘ほか五名

本部だより

理事長　味岡義一

一、防衛講演会

九月二十三日、堀江会長は富山県支部主催の防衛講演会に出席講演されました。

その関連記事は本誌四一頁にあります。

一、常務理事会

十月四日に常務理事会を開き、特に、秋季全国理事会の準備を進めました。

一、秋季全国理事会

十月十三日、九段会館に於て、平成元年度全国理事会を開催し、全国より約六十名の理事が参加し、当面の重要問題について熱心に討議し盛会でした。

腰痛がたった11円で治る!!

サンデー毎日十月八日号の記事によれば推間板ヘルニア、ギックリ腰等による耐え難い腰の激痛が次の方法でぴたりと治ると云う朗報。その方法とは、

一、両手の人さし指と中指の間に一円玉

二、中指と薬指の間に十円玉を縦にはさみ、落ちないようにテープでとめる。

三、時間は長い程いいので、はさんで寝るのがよい。

これは決してお呪いではなく、十円玉の銅は一円玉のアルミニウムと反応すると、化学的にマイナスイオンを生ずる。また手は「第二の心臓」といわれ、すべての器管を反射している。その手にマイナスイオンが入ることで、その人の悪い部分―ここにはプラスイオンがある―に影響して良い方にひっぱるとのこと。

これは、この療法を推薦した、五十嵐反射治療院（☎045―842―8218）の院長、五十嵐康彦氏の解説である。

（編集部）

自衛隊だより

大きく開けた社会への目
―自衛隊を研修して―

関根カツヨ
（須賀川市身障者福祉会）

須賀市身障者福祉会幹部研修会にこのたび参加して「心の中、人の輪、社会の目」を大きく開くことができた。

テレビなどで見ると自衛隊と、自分の目で、自分の手でふれた自衛隊の生活は、私が想像する自衛隊とは全く違っていたからである。

体の不自由な私は、福祉会が企画する研修会には毎年参加しているが、今回の研修ほど、私の身体と気持ちを大きく、そして社会から世界へと飛び立つような「大きな心」を広げさせてくれたものはなかった。

それは、「訓練の姿、礼儀正しい若い隊員の姿、わかりやすく説明してくれた隊員さんの姿、それに昼食なども準備して取りそろえて待っていてくれた」など、すべてにだった。

売店、ビデオ、どれ一つとってみても、私が頭にえがいていた以上の、民主的・合理的、そして伸び伸びとした組織運営には驚いた。

私の考えていた自衛隊とは、昔の軍隊のことばかり聞かされていたイメージだったから。その頭の切り替えには、とても良かった。「百聞は一見に……」とあるが、全くその通りだった。

近代的な平和のために頑張る自衛隊員と昼食を共にしたことは、何よりの収穫であった。時間をとって、今一度の研修を、心から希望している。たくさんの勉強をさせて頂きありがとうございました。

身障者の一人ですが、私たちも力を合わせて、「平和のため」にできることから、頑張って行くことを改めて誓いたい。

郷土とのつながり

二陸士　中野　裕二
（都城・四三普連四中）

私たちの住む都城は花と緑に囲まれた、とても環境のよい町です。このような住みよい町で私たちは、日夜訓練に励み生活しています。

こうして無事に毎日生活してゆけるのも郷土の方々の自衛隊に対する理解と協力があるからだと思います。先日、駐屯地運動会がありましたが、たくさんの郷土の皆さんがこられ、雨の中、盛大のうちに終わり、郷土の皆さんとの温かい交流が一段と深まり楽しい一日でした。このように郷土の皆さんと自衛隊が一体となる機会を設けて、交流を深めていくことは大切なことだと思いました。

入隊して一年になりますが、中隊に配置になってからいろいろな経験をし、大分慣れてきたところです。一年間を振りかえって見ると、入隊当時は体力もなく皆についてゆけるかどうか正直いって少し不安でしたが、毎日の訓練の成果によって入隊当時に比べて今では少しずつ体力もついてきました。しかし中隊の先輩方に比べるとまだまだ劣っている点が多くあります。これからもっともっと頑張って先輩方に一歩でも

近づけるよう努力して行くのが、私の当面の目標です。

入隊してさまざまな訓練行事に参加して、その都度いろんな事を経験し、またたくさんの人々と出会い、いろいろな事を教えて頂きました。これからも郷土を大切に、今まで学んだ事を教訓に自衛隊生活を頑張って行きたいと思います。

自衛隊の演習を見学して

山上　道子
（熊本県竜南中三年）

やはり自衛隊というと「近よりがたい」という先入観が誰にもあると思います。

私もその中の一人だったのですが、先日、自衛隊の演習場を見学して、その先入観がとけたと思います。

演習場では、実弾を前にして、たいへん驚きましたが、「自分もいつかはやってみたいなあ」なんて小学生並みの考えもしてしまいました。

しかし、隊員のみなさんは、もしも日本が危険にさらされた時は、銃を手にもち日本を守らなければならないので大変だなあという気持ちになりました。

自衛隊のことに関しては、ずいぶん誤解している人が多いようなので、この人たちは、この演習の様子を見てみればいいと思いました。そうすれば、少しは誤解もとけるのではないかと思いました。

いつの日か、どの国も兵器を持たない、国を守る自衛隊もなくなるような、「本当の平和」が訪れるよう、世界の各国が話し合わなければならないと思います。

しかし、今の世の中で自衛隊が必要であるいじょう自衛隊のみなさん、訓練を頑張ってください。

初の中隊検閲に参加して

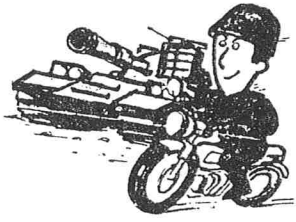
二陸士　松井　英毅
（勝田・施教導架橋中）

中隊に配置され、初めての二夜三日の連続状況での検閲に第三小隊第三班架橋手として参加し重門橋の構築をした。

雷雨の夜間作業という状況の中、浮のうの組み立て、サドル梁の運搬、ボークの運搬など、汗とドロにまみれ班長、組長からは、しった激励されながら基礎動作を実行し、夜間にもかかわらず大声を出しての奮戦でした。

同僚、先輩たちも一生懸命やっているのだからと、自分を励まし続け頑張りました。自分たちが築構した橋が全通して、その上を通過していく戦車などを見て、すごく感動しました。

検閲を終了して感じたことは、一つの物事を最後までやりとげたという自信と満足感です。これらは私のこれからの自衛隊生活と将来役に立つことだと感じました。また、自分に勝つためにも体力と根性を養成したいと思います。（以上4編・朝雪）



"新兵さん"の一日(番外篇シリーズ㊻)　連載(123)

自衛隊今は昔の物語

牧野良祥(前「翼」編集長)

ショートル市場のガキ大将

――やりやがったな!――

一種異様なショートル市場の喧噪の中で、しばらく呆然としていたおいらは、やがて気をとりなおすと、身振り手振りで商売を開始した。

ところが、ほとんどの人が驚いた表情でおいらをシゲシゲと見るばかりで、誰も買ってくれない。そりゃ、そうだろう。この界隈ではめったに見ることのない、他国それも敗戦国日本のチビガキが、これまた今まで見たことのない、首からヒモで箱をぶらさげるという駅弁スタイルで、何やらワメいているという珍妙なる姿を見れば、誰だって「何んだ、こいつは?」ということになる。

だいいち、商品の大福餅がいかなるものか日本人街の近くに住んでいる人なら知ってもいようが、このあたりになると、まづもってこの異国の菓子など知るわけがない。それを彼等にとって意味不明の日本語で、「甘くて美味いよッ!」なんて、ただ大声でワメいているだけなんだから、買ってくれるわけがないのである。

さすがのおいらも、早朝から重い餅箱をかかえての強行軍と緊張で、思わず道端にヘタヘタと腰を下していた。それに起き抜けに家を出たので、腹もペコペコである。フト気付くと、まわりを人がとりまいている。見ると、おいらと同じ年頃の満人の子供たちである。着ている満服の袖が、こすった鼻汁で黒々と光り、みな相当のツラ構えである。

おいらは、一瞬いやな予感がした。というのも、内地にいるとき悪ガキの見本みたいだったおいらのこと、悪さをする"同類"には、動物的な直感が働くのである。そうでないとガキ大将は務まらない。

思わず身構えた瞬間、横にいたすばしっこいのが、かたわらに置いてあった餅箱から、アッという間もあらばこそ、餅をワシ掴みにしたかと思うと同時に、別のヤツが餅箱をひっくり返すやいなや、ワッと喚声をあげて、クモの子を散らすように逃げだした。

(やりやがったナ!)

ドタマにきたのなんのって、こうなるとおいらは、もう無我夢中、逃げ遅れたヤツに追いつきざま足払いをかけ、倒れたヤツに馬乗りになり、その頭を「このヤローッ、コンチクショウ!」とワメきながら、ポカポカぶん撲っていた。

そのとき、大きな叫び声が耳許で聞こえたかと思うと、誰かが振り上げたおいらのゲンコを、ムンズとつかんだ。

(つづく)

(航空自衛隊連合幹部会特別顧問・元一佐)

戦史物語

慕われる指揮官

森松俊夫
（軍事史研究家）

村井頼正少佐。この方は私の四年先輩。内地では教育者として、中国大陸では中隊長、大隊長として活躍された。

若いときから、田中静壹大将のような、立派な八の字ヒゲを蓄え、すでに古武士のような風格を備えた人。果敢断行。実に決心が早く、直ちに実行に移される。作戦要務令の綱領に

為サザルト遅疑スルトハ指揮官ノ最モ戒ムベキ所トス

とあるが、まさに〝躊躇逡巡〟という語を持ち合わせておられない。しかも実行するからには、たとえ些細なことでもすべてこれが最善であると信ずる簡明な理由を立てておられるのには敬服した。

ここで紹介するのは、歩兵第二百十七連隊第二大隊長として、湘西作戦に参加されたときの戦闘指揮についてである。本作戦は、昭和二十年四月から、第二十軍が主力となり、芷江飛行場の攻略を目指して進撃したが、途中、雲峰山山脈内で阻止され、反転撤退した。

連隊は、木佐木支隊（支隊長・木佐木清次大佐）の基幹部隊であり、関根支隊長の指揮下に、軍の最左側から、これに策応した。

まず、本作戦開始前における作戦推移の予想について尋ねたところ

「正月以来、ビルマのいろいろの戦訓を読んだところだったので、これが強く頭に響いていた。米空軍が制空権を握り、重慶軍も米式化してきているので、今後は、支那戦線における作戦様相は必ず変ってくる。本作戦も、当初はうまくゆくだろうが、後方を遮断されて孤立化するだろう。わが大隊は、絶対に兵力を支分せず、全部がまとまって行動するようにと、部下中隊長によく話していた」

と、述べられた。

当時、軍首脳以下各指揮官は、かなり甘い状況判断であったが、大隊長クラスで、このような軍全般の将来を洞察し、自己の対策を考えている人は、なかったと思う。

新寧城の攻略

木佐木支隊最初の任務は、新寧城攻略だった。先遣隊の内命を受けた第二大隊は、約一ヶ月、城壁登攀訓練を実施した。

四月十五日正午が、軍命令による行動開始時刻である。村井少佐は、大隊を二コ中隊の軽装部隊と駄馬部隊に分け、軽装部隊を幾つかの斥候群として先遣し、大隊長も指定時刻前に先行した。

行程約四五粁、越城嶺山脈の峻嶮な峠道で、少数の敵を撃破し、山岳踏破に二晩費

し、十七日早朝、新寧西方に進出したところ、陣地に拠る約二ヶ連（中隊）の敵を発見、直ちに攻撃して駆逐した。

新寧城には、約一コ営（大隊）の重慶軍がおると判断していたが、すでに撤退した模様なので、独断で一コ中隊を派遣し掃討させた。わが部隊が、そのまま市街内におると米機の目標となるおそれがあるから、この部隊は、早々に引き揚げさせた。

じ後の行動については何ら指示がなく、無線も通ぜず、命令の遅いのをかこちながら、支隊主力の進出まで、丸二日、休止した。

瓦屋塘への突進

新寧で、支隊の新たな部署が行なわれた。城砦占領や敵小部隊の抵抗にとらわれることなく、まず瓦屋塘に突進し、重慶軍主力の背後から包囲網を形成することになった。

村井大隊は、再び先遣隊となり、二十日、まず武陽に向かい突進を開始した。前進路付近は、丘陵地の連続のような山地である。途中、遭遇した敵小部隊や既設陣地に拠る敵を撃破しつつ、二十六日朝、武陽南方高地に進出した。

武陽は、その周囲に堅固な陣地をめぐらしていた。大隊は、これを攻撃することなく迂回して、その北方約二粁の六王廟付近に進出したところ、前面の敵陣地から急射撃を受けた。

大隊長は、偵察の結果、敵情・地形からすれば、直ちに敵陣地の左翼を攻撃したがよいと判断したが、各中隊とも疲労のため行動が鈍重であるので、一晩休養をとらせ、明日早朝から攻撃することとした。

この日、将校二名を失ったことは、大隊長にとって大きなショックであった。

夜半、連隊主力が追及してきたらしかったが、連絡がとれなかった。

二十七日未明、大隊長は一部をもって敵陣地左翼に迂回させたところ、敵は逸早く後退したので、これに追尾し、万福橋北側高地を占領した。

追及してきた連隊主力は、翌日から全力を展開し、当面の敵陣地を攻撃した。激戦となったが、戦闘は逐次進展した。

二十九日早朝、第二大隊は、独断で、敵陣地の間隙から潜入し、山岳地帯を突破して、瓦屋塘東南方の山麓に進出した。そこで、敵の退路を遮断するよう「待ち伏せ」の陣地を占領した。

十五時ごろ、後退してきた敵重火器部隊を捕捉し、殲滅戦を行なった。敵遺棄屍体約一〇〇、迫撃砲多数を鹵獲する大戦果であった。

夕刻、大隊が集結しているとき、後退してくる敵の大部隊（兵力不明）を発見、これを奇襲すれば相当の戦果は挙げられるが、こちらも相応の損害を出すと判断し、見逃してやった。この敵部隊は西進し、茶山方向に後退した。大隊は、付近一帯を偵察したが敵を見ず、同地付近に態勢をととのえ、大休止した。

三十日朝、連隊主力は、瓦屋塘東南地区に集結し、じ後の行動を準備した。

茶山の激戦から後退へ

三十日午後、先遣隊となった第三大隊は、瓦屋塘から西進を開始した。しかし、同地西方高地に拠る敵陣地を突破できず、第二大隊と交代し茶山方向から迂回し、敵の背後に進出するため、転進した。

五月一日、第二大隊は瓦屋塘西方陣地

を、第三大隊は、同日夜から茶山付近の陣地を攻撃し、激戦となった。

二日、第三大隊は攻撃を続行したが、十時ごろ、霧が晴れると、米機が来襲し、従来にない猛烈な銃爆撃とガソリン撒布の焼夷攻撃を反復した。これに呼応して迫撃砲、重機関銃の集中射撃とともに、敵歩兵部隊が逆襲してきた。幾度か白兵戦を交え、終日、陣地の争奪戦が続けられた。

第二大隊は、瓦屋塘から転進してきたが、前進を阻止され、第三大隊の戦闘に加入できなかった。

三日、第三大隊正面の敵の反撃は鋭く、大隊は包囲攻撃を受け、損害は続出した。第二大隊は、第三大隊の左に展開しようとしたが、敵の攻撃を受け、近接戦闘を交えるようになった。

四日、第三大隊は逐次圧迫され、第二大隊陣地も各所で手榴弾戦が行なわれた。連隊長は、玉砕の決意を固め、第二大隊に茶山西方高地頂上の夜襲を命じた。

この命令を受けたときの決心について、村井大隊長は次のように述べている。

「夜襲の命を受け、第一線の状況を視察したが、これはとても成功するまいと思った。しかし命令だから止めるわけにゆかない。部署としては二線の攻撃部隊を設けた。敵第一線陣地は確実に奪取できる見込みはあるが、頂上陣地はわが後方から遮蔽しているので、たとえ奪取しても確保の見込みがない。そこで自分は、第二線攻撃部隊を率いて、山頂を奪取したならば部下を後退させ、自分だけ山頂に残って割腹するつもりであった。そうすれば命令違反にならぬし、部下を救うことができる。

夕刻、集結地に行き、夜襲の準備をするとともに、夜襲不成功の場合の処置をした。ついで連隊本部に行き、軍旗に最後のお別れをしたのち、自分の大隊は潰れるかも知れぬから、第一大隊をその後釜にするため、使わずに取っておくよう話をしておいた」

ところが、同日夕、「一時、決戦を避け反転すべき」軍命令が届き、連隊は、四日日没後、戦線を離脱し、後退を開始した。敵の追撃は予想以上に急であり、かつ全面攻勢に転じたらしく、優勢な敵部隊が続々東進している模様だった。

撤退時の指揮ほど難しいものはないと言われる。指揮官の最高度の手腕が期待されるところだ。

連隊は、軍旗を中心として団結し、担送患者隊を中央に護って、四周の敵を撃攘しつつ後退を続けた。患者を搬送するかどうかが、部隊の精強度を計る一つの基準とも言えよう。

村井大隊は、落伍者を出さぬよう、兵力が支分、孤立しないよう最大の注意を払いつつ、支隊の後衛となり、十日、第一目標の高沙市に到着した。

〝最少の犠牲をもって最大の成果を挙げる〟、この名指揮官を慕って、戦後永らく、第二大隊の戦友会が続けられたそうである。村井さんは、惜しくも昨年、幽明境を異にされた。

石川県支部だより

一、会員だより

支部会員から次のような、たよりがあったのでおしらせします。（原文のまま）

拝啓

毎度何かと、ご厄介に預り御礼申し上げます。郷友を読ませて頂く事が何よりの楽しみでございます。二回も三回も読む事もございます。八十二歳に成ります老人で、今は透析で毎週三回の医者通いです。時に下手の横好きで、和歌が大好きです。二句お送り致しますのでご笑納下さい。

なお私は満州で二十年働いて来まして、終戦後日本に帰りました。

田舎家に立てし日の丸ありし日に命ささげたみたままつりて

日の丸のはためくもとで働いた思ひ出多き異国の空を

松任市乙丸町一九六　石坂好雄

二、昭和天皇の御遺産、相続税について訴える

石川県支部では、郷友政治連盟の名において、次のような訴えを当県選出の自民党国会議に対して行なった。

陳上書

天皇陛下に対する相続税問題については、自民党皇室問題懇話会において鋭意対策が練られ、次の通常国会に「議員提案」として立案中と聞き及んでおります。

大嘗祭とともに国家的、根本問題でありますので、格段の御尽力を切願致します。

記

一、昭和天皇の御遺産に相続税を課することのないよう、現行の「相続税法」ならびに「皇室経済法」の改正を行なうこと。

一、大嘗祭が皇室の行事でなく、すべて国家行事として行なわれること。

平成元年九月十五日

石川県郷友政治連盟

代表者　杉野　勝次

理事長　佐々木外幸

衆議院議員　森　喜朗

参議院議員　沓掛　哲男

奥田　敬和

瓦　力

坂本三十次　殿

三、中部ブロック婦人部研修会実施

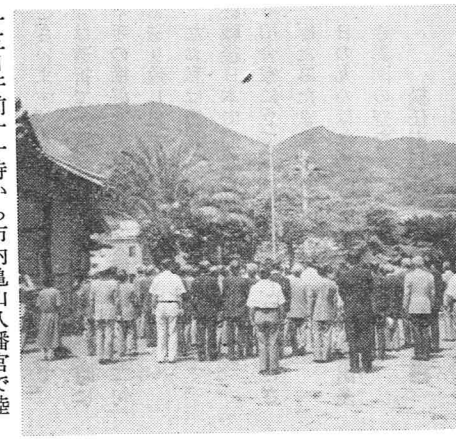
石川県支部では平成元年度、中部地区婦人部研修会を担当し、十月二七日から、二八日にかけ、加賀市片山津において実施した。

当日は本部より、地区担当理事の味岡理事長始め、各県の婦人部代表、及び当県からは杉野会長・今村副理事長、河村婦人部長以下婦人部役員が参加し、総勢、五三名の会議となった。

第一日目は国民儀礼に始まり、福島理事の軽妙な司会のもとで、研修会の最大眼目であった会員の増加等について各支部の意見、討論があり、引続き、味岡理事長の防衛講話、「石川の自然と公園」の映画を観賞、十七時まで実施し、夕食、懇談会で終り、翌日は、ゆのくにの森を見学解散した。

長崎県支部だより

佐世保市郷友会（浦速雄会長）は、八月



十五日午前十一時から市内亀山八幡宮で陸海軍人軍属戦病没者慰霊祭を遺族ら約百三十人が参列して開催した。

はじめ境内にある忠魂碑前のポールに〝君が代〟斉唱裡に日の丸掲揚、ついで忠魂碑に向かい〝海行かば〟を合唱して慰霊。終って福祉会館講堂に特設した祭壇前で慰霊式典を神式により挙行した。

祭主浦速雄市郷友会長が「祖国に殉じられた皆様の志を無にすることなく平和日本国を継承する」市遺族会の吉岡ハマ会長が「再び会うことのない後ろ姿、命絶える瞬間の苦しみ―。思う度に胸が詰まる。安らかに眠って下さい」甲斐田県北振興局長、桟熊獅佐世保市長、松永茂男市議会議長、海自佐世保地方総監部、陸自相浦駐屯地などの代表も次々と慰霊の言葉を述べ、佐世保市出身約六千柱のめい福を祈った。

北海道道東地区連絡事務所だより

スパイ防止法を今こそ求める十勝・帯広の集い

九月九日（土）一八：〇〇より、帯広市「若竹会館」に於て、スパイ防止法制定促進北海道民会議及び国際勝共連合十勝総支部主催、自民党スパイ防止法制定に関する特別委員会の後援により、特別講師として、前参議院議員（社）日本郷友連盟会長堀江正夫先生を招き講演会を開催した。

参加者百余名（うち主たる役職者は、斉藤和郎帯広市議、柳内隊友会帯広支部会長、藤代三郎連盟本部理事等であった）。

なお来賓として防衛政務次官鈴木宗男、農林水産政務次官中川昭一・北海道議会議員佐々木行雄の三先生が臨席された。

講演の内容は今日迄の法案推移と審議の実態、法制定の必要性と国防の重要性を強調するもので聴衆に多大の感銘を与えた。

熊本県支部だより

一、乃木祭の挙行

熊本県郷友連に於ては、明治天皇御大葬の日に殉死された乃木大将の御遺徳を偲んで、九月十三日午前十時半より、将軍ゆかりの熊本市の熊本城内にある加藤神社で、三十余名の参列のもと、第十一回乃木祭がいとも厳粛に挙行された。

二、第二回郷友塾の開催

乃木祭終了後、加藤神社ホールに於て、左記の通り第二回郷友塾研修会を開催した。

先づ佐野理事長の開会と趣旨説明あり、続いて講師熊本郷友連理事曾木義信教育文化委員長の「乃木大将の遺徳と現下の教育問題（主として歴史教科書について）」と題して講演に移った。その要旨は次の通りである。

昭和天皇の百十一日にわたる不屈の御闘病の根源には、乃木将軍の至誠一貫の薫陶を受けられたこと、多大であられたと拝察する。

明治天皇は将軍を御前間近に召されて

いさをある　人を教への親として
おほし立てなむ　大和なでしこ

の御製を賜わり学習院院長に任ぜられ、一身を捧げて教育に当られた。

乃木大将の教育から、現下の教育問題に移り、昭和五十七年夏の、新聞の虚報から外交問題に発展し、遂に侵略の用語に文句をつけた、近隣諸国への配意という事で結着を見た教科書問題は、その結果は現行教科書に見る、侵略、日本軍の残酷等、東京裁判史観で貫かれ、大東亜戦争ではなく依然として占領時代の太平洋戦争である。神話等についても、皇国史観、復古調と、マスコミや左翼陣営は叫ぶが、外国の教科書には堂々と日本の神話が語られ、戦争の記述に於てもあくまで史実をそのまま述べて、日本のように善玉、悪玉論ではない。

自国を忘れた現在の教育の流れは、正に教育の危機であり、国民奮起のときである。

最後に乃木将軍にあやかって、昭和天皇の崩御に際し、お供すべく殉死された四柱の方へ、講師作の和歌二首を献じて終った。

一二時四〇分終了　　参加者四十名。

和歌山県支部だより

木本郷友会では貞木義明会長祭主となり、十月七日平成元年度地区戦没者一四五名の慰霊祭を斉行した。

和歌山市長（代理）地区各界代表者及び遺族並びに郷友会員多数参加奉仕した。

県本部からは佐伯会長代表して参列祭詞を捧げた。

うれしかった四島返還発言

大和市　北村　明延（会社員　62歳）

十九日付本紙にきらりと光る記事があった。ソ連急進改革派の旗手、ユーリー・アファナシエフ・モスクワ古文書大学学長が、日ソ・シンポジウムの講演で、個人的見解としながらも「北方四島を日本に返還すべきだ」と主張したのを紹介していたことである。

本来わが国固有の領土であったものを不法に占拠した経緯からして、返還は当然としても、ソ連の学長の発言だけに国民感情として喜びに堪えないものがある。従来、国民の一部にではあるが、ややもすれば利益優先に考え、正面切って領土問題を主張することは、交渉にマイナスという考え方も見受けられ、やり切れないものがあった。

しかし、日ソ関係の真の正常化は、隣国である国民として、緊急課題であることは論を待たない。その前提として主張すべき姿勢を紙面などを通じ国民に訴え機運を高め、合意に基づく永久不変の交流の基礎が固まることを願ってやまない。

（朝日新聞声）

野島　一良選

松山　青野さみえ

全身で注射拒む子秋時雨

平凡な事実であるが鑑賞する側に強く訴えるのは、注射をうける幼児の嫌がる姿を全身で拒むと具象したからである。折ふし窓外は秋しぐれであった。

露草に露曼陀羅の仏達
分け入れば山の青さの男郎花

この句の場合『女郎花』では駄目と思う。不思議なものである。

雨音の消えてちちろの庭となり、
蓑虫や個々の孤独を風の中

蓑虫がいくつか枝にぶら下って揺れている。風の中といっても強い風ではないであろう。それらの蓑虫を『個々の孤独』と看取したのである。

岩国　村井　一露

秋の夜の影なきものを怖れけり

相当に齢を重ねて悟った境地になっているような口をきくこともあるが、或る時、ふと、死を想うて、また体調が少し悪い時など、癌ではあるまいかなど、何ともいえない怖さを感じることがある。影なきもの、である。村井氏のこの句の場合、冬の夜だときつ過ぎる。春の夜とか夏の夜だと何となくお化けめいて平凡になってくるのではあるまいか。季題の動かない姿を『秋の夜の影なきもの』が示している。作者の心象そのものであろう。所詮人間は凡夫である事を卒直に詠われた。

林道の秋を韻きて馬車往けり
秋の夜のポケット深く錠さがす
文学におぼれ秋立つ風に病む
川の面を匍ふ温泉けむりや渡り鳥

岐阜　福井　利子

木犀の匂ひ訪なふ家近し

この句、木犀の匂ひ、訪なふ家近し。と読み下して鑑賞すべきである。言わずもがな乍ら一言。

朝市やとびきり赤き蕗を買ふ

『とびきり赤き』は平凡な言葉であって非凡である。朝市の様子が活きいきと想像される。

秋雨や愚痴聞いてゐて吾をおもふ
間引菜に塩をふりつつ母なつかし

母なつかし。の字余りは母をおもう情を強めている。

松山　重川　兵介

城山に俳句ポストや木の実降る

よくある風景を『木の実降る』と詠みあげて一句とせられた。

朝鵙のアンテナに来て高鳴けり
庭池に梯子渡して松手入
新築の移転間近かや豊の秋

福島　伊藤喜代子

七十路の秋北海の空を飛ぶ
摩周湖の母の島見ゆ霧晴れて

北方領土返還促進全国婦人・青年交流集会、へ出席されたようだが、大会そのものの句は意余って表現伴わずの感あり。摩周湖の霧はなかなか晴れないが、或る時、さっと、暫く霽れる。アイヌの哀歌を秘める中の島が見えたのである。母の島、でこの句は活きた。

いつしかにコスモス咲きし夫の墓
残照をすかしてそびゆ大銀杏

神戸　泉　美冴

胡麻干して道ていねいに教へくれ
地蔵坂曲りて通草熟れてをり
秋蝶のむくろが呼べる風ならん

秋蝶の骸が折からの風に吹き飛ばされているのを、その秋蝶の骸が呼んだ風だろうと感得したときに一句が出来た。

岡山　三田　久代

秋立ちし風にゆらゆら藤うつぎ
椿の実葉かげに熟れて光りをり

秋になっても椿の葉は青く強い。椿の実が紅を含んだ褐色に熟れて光っている。中にはもう割れてきて黒い種子さえ見えるのもあるかも知れない。それらの光りを捉えた素直さ。

朝毎に虫熟れの柿落ちてをり

この作者は俳句には禁物の多くを表現しようとしたり、観念先行型の失敗作品が多かったが、今月の上掲三句、自然を見つめて表現が素直である。この道が俳句の正しい道程である。

箕面　裏口　摂城

種袋蒔きたる土に挿しにけり
平凡に老いゆく野びる堀りもして
神輿発つ合図の太鼓轟けり

日立　内田　定夫

詩(うた)ごころ鞭打たれゐる子規忌かな
石仏が秋思の御手を頬に挙げ
出稼ぎの山田守りて稲刈れり

子規忌を迎えて、頑張らねばと心されたのであろう。石仏を秋思したもう、と観じたり、出稼ぎの留守を守る女・老人の稲刈りを素朴に描写したり、私心を差しはさまなく成功された。俳句にも「凡夫の智慧（はからい）」は禁物です。

武蔵野　鶴間　俊子

野仏に片手拝みや猫じゃらし
針箱に古き木の実を見付けけり
歌碑のある校庭あきつ飛ぶばかり

那智山　井本　友敏

客去りて一人に戻る良夜かな

来客と共に名月を賞でてもいられたのであろうか、その客も帰ってしまって一人になって、しみ泌みと仲秋明月の夜を味わっている。静謐な良夜である。

下り簗大雲取は雲の中
胡弓の音越中おはら風の盆
一人寝の床はわびしき虫の声

横須賀　大関　不撓

玉野　三村　白柳

里の味母手造りの味噌茗荷
萩の道古墳へつづきをりにけり
乱れ萩流人の墓を覆ひけり
頑なに一樹に籠る秋の蟬

東京　石井　清勝

久留米　執行　七実

鎮魂の蟬ときつつ合掌す
ニューギニアの幻想さそふ秋の雲

春日市　林　藤雄

郷愁のちちろを聴いてをりにけり
秋晴も悲し御霊を見送りぬ

金沢　高桑　與三

栗落つる音がしてゐる山晴れて
野仏を囲み咲きけり彼岸花

福島　秋葉　紅風

コスモスの道の明るし雨の中
父在す頃の声する秋の音

茨城　高須　湖城

新蓮根提げて老師の門に立つ
蓮の葉に受けられてゐる秋の雨

千葉　岡田　正秋

姥捨の苔むす句碑も秋の暮
秋深き芭蕉の句碑や長楽寺

東京　勝又　正弘

古里のすすきの原に立ちにけり
園児らが秋七草を集めをり

神奈川　仲手川藤吉

颱風の去って函嶺大落暉
秋日濃し洗車の孫の背の高き

瀬戸　中島　陶村

寺詣り鉤瓶落しの秋の暮
夕べには稲架立つ道となりにけり

小牧　栗木　栄三

運動会孫の応援してをりぬ
雁渡る遠嶺に夕日のこりけり

松江　大橋新太郎

枚方の「くらわんか餅」菊を見て
菊花展遅るる妻を待ちてをり

山梨　佐竹　俊明

主なき机辺を濡らす秋時雨
　窓か、障子を開けたまま外出した机辺
　まで秋の時雨が濡らした。

富山　城山　暁舟

客連れて泊めるつもりの十三夜
　旧暦十月十三日の夜、客を伴って帰宅
　した。泊ってもらって後の月を賞で、
　或は一献傾けようというのか。

仙台　若生　葛匍

過疎村のダムの高きに芒原
　この芒原或いは曾て田圃であったとこ
　ろかも知れない。

高砂　柳　穆水

いらつめのこの野に遊びし曼珠沙華

佐世保　青山　宇宙

遅咲きの皐月一と際気品あり

岐阜　松野　啓子

今の世にダライラマあり桐一葉

藤沢　渡辺　いつ

地鎮祭行はれゐて竹の春

前月補遺　松山　重川　兵介

城茶屋の大看板や心太
踊りの輪抜けて屋台の客となり
お天守の反りし甍も良夜かな

ひとこと　類句を避けるべきは勿論である
が何気なく作ってしまうことは
往々にして免れない事でもある。その為に
は古今の句を成べく多く読む事であるが、
それはなかなか難しい事である。我々とし
ては尠くとも歳時記の例句や新聞俳壇など
目を通したいものである。さて今月随分考
えた句があった。
　神の滝群青世界にとどろけり
という句。秋桜子の有名な句に
　滝落ちて群青世界とどろけり　がある。
秋桜子のは群青世界そのものが轟くと表現
し神の滝の方は、群青世界に轟く、のであ
るし、一度はとってもよいかも知れぬとさ
え考えたのである。その一つの根拠は
　凩のはては有けり海の音（元禄）言水
　海に出て木枯帰るところなし　誓子
であったが、言水、誓子の句に較べて、群
青世界の二句は矢張り近か過ぎると考えて
取らないことにした。
　敢えて選句の裏話をして同行各位のご精
進を祈って已みません。

近　詠　野島　一良

呼べば来る白鳥秋日浴びて来る
来て立ちし嘯月台の秋高し
秋晴や素直に老をうべなひて

投句締切　毎月十五日までに必着（翌々月号で発表）　当季雑詠五句内外。葉書に判り易い字体で。

宛先　186東京都国立市東二―十二―十六

野島　一良宛

森　武次選

茨城　高須　行雄

秋雨の音を聴きつつ作付の大根畑は色めき育つ

埼玉　鈴木　幸江

長良川鵜匠の手さばき巧みなりかがり火に映え水の面輝く

千葉　植弘　親孝

葦枯るる手賀の岸辺に群れ浮ぶ布袋葵の緑輝く

何処より種子飛び来しかわが墓所に小さき鶏頭赤く咲き居り

東京　勝又　正弘

古里の夜空彩る夏祭手筒花火に歓声の湧く

神奈川　大関　民雄

十七歳二ヶ月にして関取になりし若武者貴花田関

島根　長岡　利勝

ダリヤ咲き萩咲き秋も深みたる養老院の坂のぼりゆく

わが路地に一つ鳴きゐしこほろぎが今宵めとりしか二声に鳴く

高知　森下　剛

つくづくに惜し惜しと啼く蟬のゐて耳にいやたし秋の訪れ

高知　弘瀬清一郎

雨風の跡もとどめずこの朝け芙蓉の花に朝日あまねし

高知　中田　憲秀

朝朝の炊初は先づ我が家の神神に上げ祈り来にけり

我が家の神神を共に祀り来て四十余年父は八十とせ

高知　別役　重具

嵐去る川面に秋を映しつつコスモスは咲き波にさゆらぐ

高知　大畑　元宏

夕暮れをひた啼く蟬のあまた中つくつくぼうしの声ぞきこゆる

高知　古谷　進

入道雲忽ち崩れ拡がりて須臾も措かずに屋根叩く音

高知　中平　憲白

山も田もみどりあふれて畔道に鍬持つ人も笑顔みせをり

長崎　荒木　堯巳

咳ひとつ聞えぬ夜の静けさよマンション暮らし老いの独り居

福島　伊藤喜代子

台風の過ぎて清しき空のもと紅白リレーに歓声あがる

岡山　三田　久代

狭庭辺の歯朶の繁みに鈴虫の潜みて鳴けり澄み透る声

宮城　若生　活穂

観光にあらざる用で訪ねたる秋の松島日和にぎはふ

宮城　高橋　覚

野辺の虫霜おくまでの命とて声を限りに恋をささやく

東京　坂　美貴子

人と比べ犬の命の短きを語りて孫と子犬抱きしむ

東京　石井　清勝

波がしら夜目にも白く連なりていわきの浜に秋深みゆく

コスモスの群れ咲く中に蟋蟀の声も確かに海近き丘

東京　石橋　松茂

わが娘の入院長くなりて訪ふ妻は編物持ちて行きたり

千葉　岡田　正秋

敬老の日の来る度に放映の百歳人に余命重ぬる

○喜寿の秋自作の実り詰合せ友に贈るも幸のひとつと

神奈川　仲手川藤吉

飽食になれて道義のすたれたる繁栄の世をわびしみにけり

岡山　三村　励

虫時雨はたと跡絶えて暗き朝救急車の音近く止りぬ

兵庫　泉　美冴

サルビアもはた鶏頭も種ちらし菊の蕾も色含みきて

太鼓打つ童四人の意気合ひて宵宮の森にこだまは冴ゆる

◎選後小記

○今月は、二五名、一一一首のうち、三一首を採った。

○短歌は、モラル（道徳）ではない。美の追求である。切磋琢磨・多読・多詠・向上を期して下さい。

○原稿は、毎月一回、十五日迄、直接左記へ。

記

〒214 川崎市多摩区西生田三―二三―三

森　武次宛

選者詠　痛みに向ふ（二）

緑濃きデントコン畑続き居て広さも広し酪農八雲

農場の丘より海を見渡せば鯡もどりし浜の輝き

湯の川のグランドホテルの檜風呂に脚をさすりて深深と居り

腰の痛み脚の痛みを言はばとてせん術もなし歩み続けむ

吾が足もたぎしの形に成りたるか今井邦子の足となりしか

足なくば手もて歩まむ手をふりて翼有るごと翔りて行かむ

枯枝の落つるが如く身の逝くを生きざまとして今日も道往く

蹇の友小刻みに歩みつつクラス会への道急ぎ居り

蹇の友の手をとり道往けば友は友らの情言ふなり

足腰の痛みの消えしたまゆらは楽しきことも来るかと思ふ

大森　風来子選

東京都　石井　清勝

難民船みんな元気で艶もいい

名語録君と一緒に暮らしたい

受け皿のひびに気がつく四党首

古きよき時代になかった酸性雨

出稼ぎは難民船で行くと決め

評＝第一句擬装難民、第二句礼宮殿下の婚約、第三句消費税野党攻勢、第四句環境汚染と地球クリーン作戦、第五句は再び出稼ぎ移民で結んでいる。

福岡市　川野　久男

参謀の肩書きを消しソ連行き
制限の多い写真の手がにぶり
レーニン廟ガラスの棺で眠ってる
品不足長蛇の列を横目で見
スープ飲みキエフで脱いだカーディガン

評＝作者は陸航士53期生である。一連の作品は、昔の肩書きをはずしてソ連へ行った卒直な感想を川柳で綴っている。結びの「スープ飲み……」の句で、作者の緊張感のほぐれを感じて、私もほっとした。

福島県　伊藤喜代子

北方領土復帰促進全国婦人
青年交流集会に出席して
北領の島影水平線かすむ
摩周湖の霧と再会写真撮る
えぞマリモ我が家に来たりもらい水
何時の間に寝返るマリモ音もなく
北領の返還促進天高し

札幌市　八木　柳雀

地方選守るも攻めるも消費税
サスペンス見ながらコップの指紋拭き
マイホームの夢を求めてUターン
アメニティ目指すが結局ウサギ小屋

広島市　坂井　愁山

海と島博覧会（四句）
シートピア水面に映えているデート
恐竜がタイムスリップさす太古
遣唐使船平成の世に甦り
降ってよし照っても儲ける食べ物屋

評＝89海と島の博覧会・ひろしまの現場からとらえた作品である。

佐世保市　荒木あけみ

踏まれたる花輪どなたに抗議する
罪の無い花輪踏みつけ平和とは
敬老日終れば元の粗大ゴミ

岐阜市　松田　要二

消費税だけが政治ではないんだよ
観念の遊戯なるかや施政演
ポックリ寺詣でしながら薬飲み

千葉県　岡田　正秋

先生と呼ぶ少年兵も禿頭
真面目には枕言葉の「クソ」をつけ
ベリカンに托す新米縁故米

玉野市　三村　白柳

環境の破壊地球へ飛び火する
赤信号今だ私もプロポーズ
共産圏にも民主自由の風が吹く

久留米市　執行　実

地球儀を回し派閥の溝さらえ
湯治場に杖を忘れて治癒帰還
機関銃女性党主が攻めてくる

東京都　勝又　正弘

ああ言えばこう言う年に妻も子も
右左ゴルフ飛び交うミニコース
西伊豆の恋人岬愛の鐘

島根県　山根　陟

マスコミは社党の疑惑に飛びつかず
飽食の日本へ難民寄せてくる
社会党安保自衛も自民並み

岡山市　三田　久代

八十三年（やそみとせ）わが身支えし脚いとし
流れつく難民船の数知れず
アメリカを遍歴首相の顔が出来

岐阜市　松野　啓子

埋め立ての痩せ地で燃える葉鶏頭
種播いてコスモス咲かせ壺に活け

仙台市　若生　勝緒

息絶えるまでやどかりは殻背負い
無人駅枯野の芒に迎えられ

（選後に）今月もまた熱心な皆さんのご投

句により、この欄を飾ることが出来てうれしく思います。とくに福岡の小野さんから訪ソの印象を川柳でまとめて投句していただき、この欄を一層充実させていただきありがとうと言いたい。

国会は今パチンコ疑惑で揺れている。早く真想を知りたいものである。

投句は、はがき五句、毎月十五日までに左記へ。

〒701―42岡山県邑久郡邑久町山手　選者宛

（郷友柳壇と明記）

生活の知恵

一、牛乳パックで油処理

千葉県野田市　橋本絵美

（家事手伝い・19歳）

牛乳パックを利用して簡単に古くなった油を捨てることができるんですよ。

新聞紙を半分に切って軽く丸め、これを四～五個作り、牛乳パックの口を広げて上から2～3センチのところまで新聞玉を詰めます。そこへ少し冷めた油を流し込み、十分に新聞紙に含ませて口を閉じます。そのまま燃えるごみと一緒に捨ててください。

手も汚さず、お金もかからず、おまけに汚水防止にもなる、というわけです。みそ汁やスープの残りなどもこの要領で捨ててみては。

二、あとかたづけドライカレー

横浜市　中村恒子

（事務員・48歳）

カレーを作ったあとのなべを洗うのは大変ですよね。こうすれば一石二鳥です。

カレーを全部すくったあと、なべに冷やご飯を入れて火にかけ、小さく切ったハムやウインナー、ミックスベジタブルなどを入れてかき混ぜます。なべの底やふちについたカレーがご飯に混じり、なべはきれいになってきます。最後にカレー粉を少々振り入れて、ドライカレーのできあがり。とてもおいしいし、なべも簡単に洗えるしいことづくめでしょ。

三、電子レンジで一人分の変わりご飯

山形市　関根正子

（主婦・66歳）

お茶わん一杯、自分だけの変わりご飯を作って楽しんでいます。

〝青じそご飯〟は青じその葉をせん切りにし、軽く塩もみしてご飯（冷や飯でもよい）に混ぜ、ラップをかけて電子レンジ「強」で一分間。緑あざやかに、しその香りが食欲をそそります。

そのほか、ピンク色の〝梅じそご飯〟赤飯もどきの〝小豆ご飯〟（小豆はゆでたものを混ぜて）。若い人に人気のあるのが、福神漬けのみじんぎりとくるみのきざんだものをご飯に混ぜたもので、ピリット辛くなかなか美味。と電子レンジをフルに活用して、メニューを工夫するのはおもしろいですね。

（朝日家庭便利帳より）

陸海軍編制人事資料集成

大好評発売中

帝国陸海軍八十年の全貌を明らかにする画期的三部作!!
歴史研究者、戦史研究家、全国図書館、報道関係者必携!

帝国陸軍編制総覧

井本熊男監修　森松俊夫・外山操編著　上法快男企画編集
官衙・部隊・学校・特務機関等の編制と主要人事を網羅!
四六判革装函入豪華上製本／一五〇〇頁／全一巻／七万円

陸海軍将官人事総覧 陸軍篇 海軍篇 全二巻

上法快男監修　陸軍篇（陸士四十五期迄）　18000円
外山操編　海軍篇（海兵五十八期迄）　15000円
全将官及び主要軍人の履歴を年月日迄収録した大資料!

重版出来

参謀辻政信・伝奇

田々宮英太郎著　陸軍で最も著名な軍人でありながら謎と伝説に包まれた怪物的人物の実像に迫る!　2800円

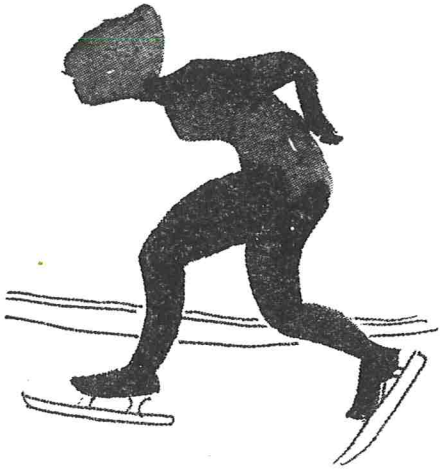
私評 ノモンハン

扇広著　ノモンハン死闘の歴史を元第二十三師団作戦参謀が三十年の研鑽の末一挙評論する話題作　3000円

陸軍大学校

上法快男編　陸軍最高の人的能力開発機関陸大の沿革と全貌を解明・関連資料多数収録　4500円

芙蓉書房出版
文京区弥生2-1-1 ☎03-813-4466
振替 東京6-351361 出版目録無料送呈



初回は切手300円で見本誌を送ります。

実物交換会会誌

旧日本陸軍・海軍 実物

軍装品

■出品500点以上■定価500円■10日発行■

旧軍隊関係の品物、何でも現金化します

代表者 浦田雅治

交換誌 檻楼(らんる) "S"係

〒710 岡山県倉敷市鶴形2-5-15
郵便振替口座 岡山6-11331

☎0864-22-9383

編集後記

◎変動常ない国際状勢下、特に東西両陣営の序々に進みつつある緊張緩和、わけても東西両陣営の代表とも言うべき米・ソの最近の動きを見ると今にも真の意味の世界平和が訪れるような感じさえして来ます。

国内に於ても、来るべき衆議院解散総選挙の結果を見なければ判明しないが、先の参議院選に於ける自民党の敗北以来、勝に乗じた社会党を中心としての連合政権なるものが着々として進行し、社会主義政権の成立も巷間取沙汰されております。

こうした国内外の状勢を踏まえて、我が国永遠の平和維持を確保するため国の安全保障はどう考え、どう施策したらよいか、この問題について、国防問題研究会のシンポジウムが開かれました。「日米関係再考」がそれであります。真剣な検討をお願い致します。

◎世に忌まわしい事件が起る度に、道徳教育の必要が取り上げられます。家庭の躾に於て、各段階の学校教育に於て、更には全般の社会教育に於て戦後道徳教育が無視され、人間としての在り方、是非善悪の区別、人として踏み行うべき基本的途の教育が等閑された結果が今日の如き道義退廃の世相を生じていると言っても過言ではありません。その教育欠陥の一端を慶応義塾大学名誉教授の気賀健三先生が解説されております。検討の資にして頂きたいと思います。

◎過般実施されました、全国青壮年研修会の実施報告と一部参加者の所感を掲載しました。連盟年度事業の最重要事項の一つであるこの行事の有り方を考究する参考にして頂きたいと念願します。

◎折角投稿した原稿が郷友誌になかなか掲載されないのはどういうわけかという、ご不満、お叱りの声を屢々耳にします。誠に尤もなことでありまして大変申し訳ないことに思っております。

敢えて弁解を申し上げるわけではございませんが実情を明らかにしてご諒解を賜わりたいと存じます。

総ての月刊誌がそうであると思いますが毎月一日の発行日迄に読者の手に届けられることを原則としておりますので、それには発行日の月の遅くも二ケ月前から準備を開始しなければ間に合いません。従ってその段階で既に入手しているか、入手可能の原稿を基礎として編集企画を立て、その月の二十日頃には全原稿を揃えて印刷所に渡しませんと所望の時期に誌は出来上りません。

そんな次第で予期しない原稿又は二十日過ぎ入手の原稿の掲載は早くて三ケ月後ということになるのが実情であります。

◎郷友誌ご講読の申込みは振替で。

郷　友（第三十五巻第十二号）
（通巻第四百十八号）
発行兼編集人　赤羽根　澈（きよし）
発行所＝社団法人日本郷友連盟
〒一六〇　東京都新宿区若葉一丁目二十一番地
電話（341）四三八六
（353）二三四一・二三四二
毎月一回一日発行
定価・一部二百六十円（送料共）
振替口座・東京四—七一八七七
印刷所＝共同印刷株式会社
〒一一二東京都文京区小石川四の十四の十二
電話・案内台（817）二一一一

部品から部材へ、そして今、システムへ

40年前
1本の小さな釘が
始まりでした。

一本の小さな釘をつくることからスタートした当社は、以来、
各種の特殊釘、フックボルト、ジョイナーなど、建築用の金物メーカーとして、堅実に歩んで参りました。
建築工法が進歩し、材料の多様化・高グレード化が進む現在、
アルミ化粧材、笠木、システム天井、天井・間仕切下地などのビル用建材をはじめ、
体育館・アリーナ、OAフロア、集合住宅フロアなどシステムフロア、
また、工場・倉庫などのための換気製品、排煙装置、建築用シーリングにいたるまで、
建築分野のなかで、多岐にわたっています。
わたくし達は、これからも独自の技術と独創的なアイデアで、
21世紀の建築資材の研究・開発を進めます。

金属建材のパイオニア
三洋工業
本社：東京都江東区亀戸6－20－7　☎03(685)3452

12月のお料理

ポットローストポーク　　堀江泰子（料理研究家）

★鍋で作るローストポークです。和風好みの方は辛子醤油ですが、アップルソースもよくあいます。クリスマスにもよいでしょう。

材　料

肩ロース（又は豚ロース）……500～600 g
塩、胡椒……少々
にんにく……1片
油……少々
酒……½カップ
じゃがいも……400 g
塩
胡椒
クレソン

作り方

①豚肉はにんにくの切り口で全体をこすりつけ、塩、胡椒を叩く様に強めにしてたこ糸でしばり型を整える。
②厚手の鍋に油をごく少量入れ、豚肉を入れてまわりに焦げめがつく様に炒める。
油が出た時は別の器に取っておく。
③酒½カップを鍋を火から下して加え、ぴったり蓋をして弱火で1時間位蒸し焼きにする。（箸が通り柔かくなる迄）途中で水気がなくなった時は¼カップまで水を少しづつたして蒸し焼きにする。
④じゃが芋は皮つきのまま1㎝幅の輪切りにして茹でる。
⑤サラダ油又は豚肉から出た脂でじゃが芋を焦げめがつく位焼き、塩、胡椒で味をつける。
⑥豚肉は薄切りにしてじゃが芋を添え、辛子じょうゆかアップルソースをかける。

アップルソース

紅玉……2個
砂糖……小さじ2
生姜……少々
シナモン……少々
バター…大さじ1～2

りんごは6～8つ切りにし芯をとって小口から切る。水大さじ6と砂糖を加え（好みで生姜少々加える）柔らかく煮て裏ごしにかける。好みでバター大さじ1～2、シナモン少々を加え、火にかけて練る。豚肉にかけて食べる。